日本建築協会 発行

復刻版

建築と社会

第79巻

第26集第８号～第27集第３号（昭和18年８月～19年３月）

不二出版

復刻にあたって

一、原本の誌名は次のように変遷している。
　『関西建築協会雑誌』（大正６年９月～７年12月）
　『日本建築協会雑誌』（大正８年１月～８年12月）
　『建築と社会』（大正９年１月以降）
一、表紙を若干縮小して収録した場合がある。また、原本が断裁されているため、不完全なものがある。
一、断裁による不完全な文字は組み直したものがある。
一、表紙の刷色は一色に統一したため原本とは異なる。
一、口絵はカラーの頁も全て黒一色で印刷した。
一、「会報」の通頁には乱れがあるが、原本のままとした。
一、各集ごとの「総目録」は、発見できたものに限り、該当集の第一号の前に収録した。
一、裏表紙は、『第一集第一号』に限り収録した。
一、目次の発行日は、奥付に記されたものを採用した。
一、前付広告の一部及び後付広告は収録しなかった。「広告見出」「広告目次」および「掲載広告一覧」（復刻に際し新たに組み、付け加えた）を参照して頂きたい。
　また、広告頁には独自の頁が付けられているため、本復刻版の広告頁の頁は一貫していない。
一、本復刻版は日本建築協会所蔵の原本を使用した。

（不二出版）

【第79巻目次】

第26集第８号　昭和18(1943)年８月15日発行
第26集第９号　昭和18(1943)年９月１日発行
第26集第10号　昭和18(1943)年10月１日発行
第26集第11号　昭和18(1943)年11月１日発行
第26集第12号　昭和18(1943)年12月１日発行
第27集第１号　昭和19(1944)年１月１日発行
第27集第２号　昭和19(1944)年２月１日発行
第27集第３号　昭和19(1944)年３月１日発行

(注)第26集第８号の17頁には、原本の印刷状態が悪く、判読できない部分があります。

第26集第９号の目次頁の発行年は原本の誤植

大正6年9月14日　第3種郵便物認可・昭和18年10月25日印刷納本・昭和18年11月1日發行（毎月1回1日發行）

建築と社會

第26輯　第11號
昭和18年11月1日

11

社團法人 日本建築協會

本店　大阪市西區土佐堀通三丁目二四
電話土佐堀(四)三四一七・一一二四
東京支店　東京市京橋區木挽町五丁目二

株式會社

錢高組

支店　名古屋・門司・京城・豪北・北京
出張所　神戸、吳、平壤、高雄、上海、濟南
天津、石門、錦縣、大連、鞍山、奉天
哈爾賓

滿洲法人
株式會社　錢高組　新京市八島通一八

特許耐酸被覆東洋被覆鋼鈑製

○屋根葺鋼板（商標ナシ谷樋）其他特殊建築屋根材料
○排氣ダクト・大島式通風器
○防空換氣遮光裝置・新製屋根材セラクタイト
設計製造責任施工

登錄商標　梅

商號　オリエンタルメタル製造所

東洋被覆鋼鈑製造所

所長　津村芳三

本社及工場　尼崎市大物北口(阪國電停前)電尼七六・一四六六番
電報略符(ト)又ハ(トヒ)
東京出張所　東京都日本橋區通二(大同生命館內)
東京工場　埼玉縣蕨町蕨驛前
廣島出張所　廣島市袋町六番地(富國館內)
北京出張所　北京內四區四四北小拐棒胡同廿四號
滿洲販賣店　大連市株式會社福昌公司

白蟻防除

所場全國
工日本
施日



白蟻駆除豫防方法
一、前田式白蟻誘導撲滅法
二、前田式白蟻防蟻防腐法（白蟻侵害並予防的施設）
三、樹木殺菌殺虫法（風致木庭園樹保護）

・油斷大敵氣付いた時の直ぐの駆除
・被害を受けて騒ぐより受けない前の予防が大切
白蟻被害年額二億五阡有余円の現今木材危機の今日　白蟻防除は國家的急務

諸官廳大会社御指定

前田白蟻研究所
本店　和歌山市湊通リ一丁目三番地
電話　和歌山四三八九番

本社　大阪市東區上本町四丁目六一〇

株式會社

木村組

電話南(七五)六六〇〇〇五番
工作所南(七五)九四一七番

建築と社會

第26輯　第11號　　昭和18年11月發行

十一月號

目　次

方言と民家……瀧澤眞弓…(1)
古典に現はれた建築の解釋……藤田德太郎…(10)
新都市と新農家……山田正男…(13)
工場勞務者厚生施設……平岡正夫…(18)
夜・晝・闇……小田島兵吉…(26)
戰時の家具の問題……劍持勇…(31)
☆時　評☆
空爆と文化財に就て……草一路…(34)
☆紫烟室☆
或建築家の日記……青山正義…(37)
中支に於ける建築……富田清…(39)
會　報……(41)

三星印岩綿製品
防音・保温・耐火裝置
三星岩綿（バザール）ブロック構成の防音裝置は爆音に耐へる吸音率を有す
設計　大阪市北区中之島五ノ三〇　大阪田島應用化工株式會社　電話土佐堀(44)1323.5682.6221.7294
施工　東京市神田區岩本町三番地　三星産業株式會社　電話浪花㈹0072番

會　　告

奈良地方見學御案内

大阪地方會勢幹事會11月の行事として下記の通り奈良市内の佛閣、古蹟を見學併せて紅葉深き春日野の秋色を觀賞いたします何卒奮て御參加あらんことを

日　　時　**11月25日（木）**午後1時集合（晴雨不論）
集合所　關急奈良驛降車口
行　　程　奈良市内元興寺―木辻（木辻格子）―十輪院―福地院―頭塔―新藥師寺―春日野秋色
夕　　食　奈良ホテル（午後6時頃）午後7時解散の豫定
交通費　御自辨のこと
會　　費　**金7圓也**　振替（大阪39975）其他により前納のこと
締　　切　11月24日午前中迄に着する樣「ハガキ」を以て御申込みのこと
但し豫定數に達した場合は期日前でも締切ります

◎ 參加者は本協會員に限ります
◎ 會員章は必ず御佩用願ひます
◎ 代人並に同伴者は御斷り致します
◎ 當日警戒警報發令の場合は中止致します

昭和18年11月

會勢幹事會

不明拂込金に就て

本年1月29日附京都寺町二條局より振替にて拂込を受けたる金壹圓也及び本年8月30日附東京下落合局より振替にて拂込を受けたる金四圓也は拂込人及其目的記入洩れのため整理上困難致して居ります御心當りの向は至急御知らせを願ひます

昭18年11月

社團法人　日本築建協會

方言と民家（註）

― 日本建築史の一方法としての民俗學 ―

瀧澤眞弓

都と鄙

およそ歴史をかへりみるに、國運隆昌に赴き國民精神の昂揚せるときは、つねにその文化の根柢に復古主義が横たはつて居り、しかもそれは洋の東西、時の古今にわたる通則とされてゐる。現にこのことを眼前の事實として端的に示してゐる現象は最近のわが國出版界に於ける古典ものの流行であらう。記・紀・萬葉の類はいふに及ばず、大凡いはゆる國文學と稱せられるものに關する圖書の氾濫は、正に文字通りの文藝復興であるといはねばならぬ。

かかる「古典の復興」に對して「國語の整備」といふことがまた一つの緊急題目である。殊に最近は大東亞共榮圈の建設といふ問題に逢著して、國語は更めて「日本語」として反省されることとなつた。從つてまた明治時代以來の「標準語」の問題はこの際更めて「正しき日本語」の問題として再發足を要請されることとなつた。しかもこの新しい要請に對する言はば部分的答案として、字音假名遣ひや標準漢字の如きものが提出されてゐるのである。かくて現下の國語問題は、古典への回歸と新しき日本語の發足といふ、一見相反し、場合によつては互に相克するが如き二元的對立の觀を呈してゐるのである。が、今日の斯やうな現象も、その由つて來るところは、既に明治初年以來約束されてゐたところである。

明治の文化政策にあつては「國語」なるものが、學問研究の立場と日常實踐の立場と互に沒交涉のままに放置されてゐた。即ち、學問研究の立場にあつては古典的文獻に存するものが純正な國語とされ、いはゆる國文學とは古典的文獻の訓話解釋に外ならなかつたといふも過言でない。しかるに一般國民の立場に於ては標準語の名の下に、實は理想化された東京方言を一應習得することが教育的義務であつた。一應習得とは、その標準語はただ教科書の上にのみ在つて、全國津々浦々、ひとたび教師と兒童との直接應答となると、忽ち夫々の土地に即した方言が活躍を始めたからである。標準語も亦要するに一種の學問的存在に外ならなかつた。そしてこの二つの立場に共通なことは、宛も書物を離れては國語が成立しないかの如き觀を呈してゐたことである。

國文學が古典的文獻を以て正統とする態度には、すでに舊幕時代以來の國學の傳統があり、其所におのづから國民精神の涵養せられた功績は否むことが出來ぬ。また明治時代以來、標準語の普及といふことが、地方文化の封建的分立を相互融通せしめて國民文化渾成の原動力となつたことも認めねばならぬ。が、この二つの方向は、そのままでは要するに生ける國語の現實に接觸する機會を持たぬといふことも事實であつた。それは、方言なるものの存在を輕視してゐたからである。實に方言は、農村に漁村に又各地の町々に、日常生活の言葉として、しかも古い歴史と傳統とを負うて、生きてはたらいてゐるのである。

方言なるものが各地特有のものなるが故に普遍性に乏しいことは首肯されねばならぬ。が、方言が正しい國語から横ざまに外れたもの、乃至は粗雜化したものであるとする如き見解は首肯し難い。しかも、かかる見解が一般の常識であり、あ

（註）最初編輯の方から課せられた題目は「建築史學の一方法としての語の研究」に關するものといふのであつた。が、それでは問題が抽象的すぎるので諒解を得て上掲のやうな題目にあらためた。これはかねて考へてゐた問題であり、既に斷片的には一二專門外の誌紙に隨筆として寄せたこともあるが、今回求められるままに敢て不備をかへりみず一應まとめてみることとした。大方の高敎を希ふ次第である。

まつさへ方言は俗語と同一視される傾向さへあつた。が、既に新井白石も注意してゐる如く「方言の中にも亦、各、雅言あり「俗言あり」（東雅）で、方言必ずしも俗語ではない。江戸末期の刊本なる「物類呼稱(諸國方言)」の序文にも「畿內にも俗語あれば東南の邊國にも雅言ありて是非しがたし」といつてゐる。更にまた、歷算家として知られた西川如見の如き、はその著「町人囊」（卷三）のはじめに「都の詞にもかたこと多し。ゐなかの詞なりとて笑ふべからず。神代の遺風は結句外國に殘りてある事多しとかや」と、方言の歷史的意義にまで關說してゐるのである。即ち、いはゆる神代の遺風が――從つて言葉もまた――都にては頗々たる流行の變化のために廢れ去つたにもかかはらず、田舍に於てはその生活の保守的なるが故に傳承しつづけられるといふのである。このことは既に古く、賀茂眞淵が萬葉集の東歌の用語に關して說いたところであるが、新しくは日本民俗學の開拓者なる柳田國男氏によつて「方言周圍說」として提唱されたところである。かくて、古き都に於て嘗て語られたことのある「みやび」な言葉が、圖らずも方言といふ「ひなぶり」姿に身をやつして田舍の片隅にかくれてゐるといふ秘密が首肯されねばならぬ。

事と言

コトバとは何か――わが國には古來コトダマといふ語がある。またコトワリといふ語がある。その深い意味に關しては言語哲學にゆづらねばならぬが、一見明瞭な如くこれらの語に一貫して存するところのものは「コト」である。これを漢字によつて示せば「言」であるとともに「事」でもあるが、その根源に於ては「言即事」である。吾人は茲に言葉が未だ文字化せず、人々の口より口へと生きて動いてゐた原初の姿を思ひうかべねばならぬ。もとより斯やうなことは常識として周知のことであらう。が、この周知のことも、從來はただ、主として國語學者などによつて、抽象的な意味として考へられてゐたにすぎない。しかるにこのことを具體的な事物に即して端的に實證せんとしたのが民俗學一派の人々であつた。いはゆる「方言の採集」といふがそれである。それは在來言語學者が試みてゐた如き單なる語彙の蒐集や比較研究に止まらず、むしろその語彙を手段として、これによつて語られてゐるところの各地の事物を調査研究するのである。その學派の語を借れば「民俗語彙」によつて「民間傳承」を求めるのである。尤もかかる方法は、つとに獨逸の民俗學者メリンゲル氏（Meringer）の唱道したところであり、氏はその趣旨のもとに「言葉と物事」(Wörter und Sachen) なる機關誌を發行してゐた由である。吾人はこのドイツ語に對して、わがヤマトコトバに於ては言と事とが共に根源的な「コト」に歸することの深き意義をここに更めて省みるべきである。

尤も、民俗學はその方法に於て言・事の同一性から出發したにしても、その赴くところは多岐にわたつてゐる。且この學派は民間篤志家によつて育成せられたものなるが故に、中には單なる好事者流も少くない。從つて正統な學界から見れば、要するに素人の雜學にすぎぬとして輕視される傾さへあつた。が、その間おのづから確乎たる方法の存するあつて、今日では既に隱然たる一派としての存在を否むわけにはゆかない。しかも學界の一部には、つとに民俗學的方法を採用することによつて新生面を開拓し、既に多大の收穫をあげ得た向も少くないのである。また現に、昨春の日本諸學振興委員會の委員側よりの報告に徵するに――それは「國語國文學」に關するものであるが――最近の發表者の中に「相當數多くの民俗學的立場による者の「進出」が注意せられてゐる程である（東京帝大敎授、久松潛一氏「國語國文學特別學會記」及び、東京女子大敎授、西尾實氏「國語國文學特別會所見」）。

次いで昨秋の「國語と國文學」誌には東北帝大敎授、小林好日氏の「語源學と方言語彙學」と題する甚だ示唆的な論說が發表された。つとに方言學者として令名ある氏は、この論說に於て具體的な語例をあげつつ、わが國の語源學のために方言研究が新しき方法を提供すべきことを提唱されたのである。所論の全般を茲に要約する遑をもたぬ。が、その中からの當面の問題に對して特に示唆的と思はれるところを摘記してみることとしよう。曰く――

今日吾々が言語の歴史的研究法に開眼して、語の形態を語根、接頭辭、接尾辭等に分析する方法を知つても、日本語に於てはその研究に限度がある。分析できる語は少數の限られたもので、分析できない語の方が多いと思はなければならない。これからさき國語學が進歩しても、國語の文献による研究にとゞまつてゐる限り、あまり有望のやうに思はれない。云々、

と、また曰く——

わが國に於ては方言語彙學と稱すべきものは西洋に於ける語源學に代るべきもので、わが國に於ける語彙の歴史は之によつて或程度まで説明せられると考へる。云々、

と。さて、既に大學教授の側から斯やうな言説を聞くに於ては、結局民俗學の勝利であるといふも過言でない、といふことにもなるのではあるまいか。

この小林氏の所論には、その標題によつても明らかな如く、「語源」と「方言」とが對比されてゐる。私は今この對比になぞらへて、茲に比例的に「建築史」と「民家研究」といふ對比を措定しようと思ふ。もとよりそれは數學の比例式に於けるが如き嚴密な意味ではない。が、敢て上揭引用最後の一節になぞらへて言つてみるならば「日本建築の歴史は民家の研究によつて或程度まで説明せられる」といふことにもならうかと思ふのである。

遺物と傳統

私は茲に更めて、明治初年以來、日本建築史の開拓と育成とのために貢獻せられた先學諸家に滿腔の敬意を表したい。ひるがへつて省みるに——私は自ら敢て建築史家を以て任ずるものではないが——吾々後學が今日もなほ先師所傳の規矩をそのまま墨守する如きは決して先師の示教に報いる所以ではない。俳聖芭蕉は南山大師の遺訓をひいて「古人の跡を求めず、古人の求めたるところを求めよ」と子弟を導いた。しかもなほ、今日の學徒のうちには舊態依然としてただ古人の求めてゐる者はないか。端的に言へば、學界の一部には、研究と言へば直ちに特殊な遺物に執する傾はないであらうか。その方法は、遺構の實測、文獻の精査等であり、その文獻も多くは社寺の緣起、資財帳、或は特殊な日記の類である。しかも屢々その主たる目的が建立年代の確認といふやうな點にありさへする。そのために、いきほひ論點が、遺構に於ても文書に於ても、細部の比較・分析・考證といふことに拘つて來る。敢て上揭の小林氏の口吻に倣へば、その際分析できるものもあらうが、できないものの方が多い、といふことにもなるのではあるまいか。

由來、歴史學なるものは果して科學なりや藝術なりや、といふ提言がある。その由つて來るところは、歴史があくまで事實に立脚しつつも、つねに史家獨自の識見が要請せられてゐるからであらう。史家は、いはゆる「古を食ひてすでに化せる」者たらねばならぬ。歴史が事實に立脚すべきことは今更説くまでもないが、事實とは必ずしも遺物に固着したものではない。遺物そのものは要するに史料である。歴史は單なる個々の史料の年代順的配列であるべきでない。幾つかの史料を手がかりとして、史料缺如の領域に向つて慧眼な洞察を行ふところに史家の重大任務がある。しかも一方、遺物調査の實情は、今日では殆ど新領域開拓の餘地無き程に至つてゐるのではあるまいか。よしんば之れ有りとするも、それは特殊な役所、乃至は國寶調査會の如きものの事業に一任すればよい。而して建築史學の主力は一應この邊で遺物主義を脫脚すべきではあるまいか。

遺物主義を脫脚するとは、端的には、その研究乃至教育をして古社寺の調査や見學より解放せしめることである。ここに再言すれば事實とは必ずしも遺物に固着したものではない。更めて提言すれば、歴史的事實は現在國民と共に理けるものでなければならぬ。然らば、過去の事實に立脚し、しかも現在國民と共に生けるところの「歴史的事實」とは何であるか。それは國家乃至國民の保持する「傳統」である。

私見によれば、物象的にもあれ精神的にも國家乃至國民の傳統と相關するところ無き、單なる過去の物件そのものの如きは、たとへ事實なりとも所詮歴史には緣なき、言はば骨董的存在である。生ける傳統を通して過去の事跡を追體驗するところに、はじめて歴史的理解が成立する。しかも在來の史學に於ては、屢々過去の事跡がそれ自身と

して抽象分析されてゐたのではあるまいか。傳統との聞聯なきところの古色蒼然たる過去の事跡或は物件の如きは、よろしく考古學の領域に移讓さるべきである。

傳統を通じて過去を追體驗するといふことになると、歴史の求めるものは事構の上に意思の參加したものであり、從つて「事」と「行」との融合した如きものとならう。私は茲にドイツ語の〃Tatsache〃といふ語を思ひ浮べる。この語は普通「事實」と譯されるが、字義に即いて分析すれば、「行・事」であつて、行爲的體驗を含んだところの事實である。この字義に倣つて、歴史的「事實」は、更めて「事」と「實」との一致の上に成る、ともいへようかと思ふ。或はむしろ、歴史の求めるものは存在的な事よりも體驗的な實であるとすべきかとさへ思ふ。この意味に於て、更めて歴史的な「眞實」を要請したい。然らば、かくの如き意味に於ける眞實なるものの具體的な事例は何であるか。私は卒直に、それは何よりも先づ民家である、と答へたい。

神社と茶室

地方の方言など勿論國文學の用語とはなり得なかつた。が、その國文學の用語も實は全國幾多の方言中の一方言に外ならず、而して上揭小林氏の注意するところによれば、現存する最古の文獻たる記・紀・萬葉の如きにあつても、要するに一方言であり、且極めて新しい時代の姿である。いはゆる奈良「時代」の言葉は、實は奈良「地方」の方言であり、平安時代の言葉は京都中心の方言である。ただし京都は永く政治・文化の中心地なりし故に、いはゆる「みやび」な言葉が國語の模範として承認されたまでである。

然るに鎌倉時代となるや東國の田舍言葉が近畿地方に進出し來つた。かくて語彙にも語調にも著しい變化が生じ、やがてはそれが文學の上にも反映するに至つた。從つて室町時代の言葉は、中心地は京都であつても平安時代とはその樣相を異にする。されば時代的に省みて、いはゆる鎌倉文學の言葉が平安朝のものよりも新しいとは斷じ難い。即ち、極めて古い時代に地方に傳へられた古代日本の語が東國に保存せられ、その古代的な素朴な姿が、時勢と共に中央に進出して來たといふ事情があるからである。だからその樣式的年代は却つて逆な場合もあるといはねばならぬ。とにかく、樣式の歴史は、一本の年代記の糸に綴るには少しく錯綜しすぎてゐる。

> 例へば、平安朝の特色ある「あはれ」といふ語が鎌倉時代に「あつぱれ」と變つた。が、これは都風のものが田舍風になつた、といふやうな單純な現象ではない。アツパレの方が却つて古い時代の音韻を傳へてゐるのである。元來國語にあつてはハ行音は古くはP音であり、それがph・F・H音と漸次柔弱化し、遂にはワ行音、ア行音にまで退化したのである。だから平安朝式の女性的な「あはれ」が、鎌倉時代の男性的な「あつぱれ」となつて古代的な素朴な姿を復活させたのだといふことになる。

以上は、斯道專門家の所說の借用である。一門外者流の私如きが何故に斯やうな問題に立入つたのであるか。それは、實に殆んど全く同樣な事情が建築史の上にも比例的に看取されるからである。

私は古事記を以て日本の第一古典とする。その意味に於て、最古の神社建築樣式を古典的と呼ぶことにしてゐる。そして、私はかつて後代の茶室建築の樣式を以て、この日本の古典樣式の復活だと論じて一部の人々の非議に接したことがある。云ふまでもなく、喫茶の風はその源を支那に發し、佛家によつて將來せられ、後世茶室の標準型ともいふべき四疊半の室の如きも禪家のいはゆる方丈に由來するとされる。爾來茶の湯は禪寺と不可分の關係にあつた。斯やうな歴史的事情からすれば、茶室建築は全く佛教的なものであり、從つて日本の古典的建築たる神社建築の樣式とは、その意義に於て根本的に相異なるものとされねばならぬ。が、わが國の禪宗は鎌倉文化のうちに育成されたものである。鎌倉文化が如何なる動向を示してゐたかは略上述の言葉の歴史から推定されよう。東國の方言の中央への進出は、平安朝的都會文化の沒落と同時に鎌倉的田舍文化の隆興を語るものだ。茲に更めて農家建築の存在を思ひ浮べよう。そして、この農家建築の樣式を、神社と茶室との中間に（中介者として）置いてみよう。大社造の如き最古の樣式が農家の形成と密接な關係に

あることは既に史家も認めるところである。が、私見によれば、茶室建築の様式はその範を農家にとつたものである。もとよりその様式的完成はずつと後代であるが、その萌芽は既に、禪宗の日本化と共に、鎌倉文化の中に準備されてゐたのである。(註)いはゆる茶の湯の儀禮は後世の宗匠たちの設定したところである。が、要するに彼等は新興階級たる武家のために新たなる儀禮を案出提供したのである。しかも、その動因は如何にして平安京の貴族的儀禮を否定すべきかといふ點にあつた。如何にすれば身分低き武家が身分高き大宮人たちと同席であり得るかといふことにあつた。敢て結論を急げば平安京的・宮室的儀禮に代へるに圍爐裏ばたの團欒を以てしたのである。その意味に於て太古日本の遺風に立歸つたのである。それは正に、鎌倉時代に田舍言葉が文化の中心部に進出し、やがて、ほぼ室町時代に至つて京都語と渾然融和するに至つた事情と比例する。

茲に再び上揭小林氏の所說を思ひ浮べよう。即ち、記・紀・萬葉の如き「古典」の言葉も要するに一方言であり、しかも極めて新しい時代の姿である、と。同樣のことが神社建築の樣式についても考へられる。即ち、出雲の大社の如きは元々農家の樣式と軌を一にしたものである。その祭禮も昔は心の御柱を中心として行はれたものである。が、既に古事記にも明らかな如く、垂仁天皇の御代に至つて「新しい時代の姿」として宮殿風が採用されたものである。

ところで、吾人が今日見るところの神社建築は、それが太古の遺風であるにしては、あまりに洗錬された美しさをもつてゐるではないか。もとより特殊のものは別であるが、古式とされるものでも多くは延喜式制定以後のものである。文化の中心たる平安京に於ける所産として、その樣式的洗錬は當然であり、その文字通りの「みや（宮）び」な姿は日本建築の理想を具顯したものと見ねばならぬ。が、それはまた一面に於て、言はば官制的標準型であつたといふことも考へられねばならぬ。而して、この洗錬統一せられた樣式に較べて、田舍の農家の如きものはその樣式も手法も粗野雜駁であり、且夫々の地方によつて雜多である。この「ひなび」た（むしろ「ひね」た）姿の何處に日本の國風が存するであらうか。かかる問題に對しても方言の問題は示唆を提供してくれる。さきに引用した「物類呼稱」であるが、その序に曰く——

> 都會の人物（ひと）は萬國の言語にわたりてゐのづから訛少し。しかはあれど漢土の音語に泥みて却て上古の遺風を忘るゝにひとしく、邊鄙の人は一群一邑の方語にして、且てには惡しく訛多し。されども質素淳朴に應してまことに古代の遺言をうしなはず。夫凡我朝六十餘州のうちにても山城と近江、又美濃と尾張、これらの國を境ひて西のかた筑紫の果まで人みな直音にして平聲多し。北は越後、信濃、東にいたりては常陸及び奥羽の國々すべて拗音にして上聲多きは是風土水氣の然らしむるなればあながちに褒貶すべきにも非ず。

とあり、これにつづけて、さきに引用した「畿內にも俗語あれば東西の邊國にも雅言ありて是非しがたし」と言つてゐるのである。これはまことに卓見とすべきではあるまいか。かくて都會的洗錬必ずしも國風の淳化にあらず、むしろ却つて外來的影響によるところ多く、結局眞の國風は邊鄙の田舍に存するといふことになる。更に省みれば、平安朝的「みやび」化は、實は女性的柔弱化でもあつた。日本の原初の姿は、從來吾人が想定してゐたよりも、もつと粗朴な、もつと逞しいものであり、且深くその國土に培はれたものであつたことを省みなければならぬ。

（註）禪宗と共に宋の文物の傳來したことはいふまでもないが、言葉に於いてもまた宋音の流行を見るに至つた。但し當時の人はこの新來の外來語に對して更めて「唐音」といふ名稱を與へた。恐らく支那語といふほどの意味であつたらう。が、このことは建築界に新たに「唐樣」なる樣式の入り來つたことと比例的な現象である。斯やうな一面があるから、もとより事情は單純ではない。
また別な動向が南都を中心にあらはれてゐる。それは天平藝術への復古である。が、この動向もまた恐らく上述の新しき外國文化に觸發されたものだ。即ちかつて天平の昔、外來文化によつて奈良文化の榮えたことが回想され、ここに天平藝術の復興が萠したのである。が、これと相似た傾向が、文學に於て、たとへば源實朝の萬葉調の歌や、仙覺の萬葉研究などにあらはれてゐる。
建築といはず、言語といはず、文化は要するに歷史的現象として共通の樣式をもつのである。

經と緯

かつて、文部省國寶鑑査官、丸尾彰三郎氏は日本諸學振興委員會研究報告の席上「日本彫刻史の緯（よこいと）」といふ標題の下に、豊富な實例をあげつつ、時代といふ經（たていと）に對する緯としての地域の相關々係を論ぜられた（これは昭和十五年の報告「第六篇、藝術學」に採錄されてゐる）。内容は多様であるが、趣旨は明瞭である。即ち、その結論によれば、在來の美術史がなし來つた如き、作品の單なる時代順の（縦の）配列だけでなく、同時に地域的な（横の）事情をも明らかにする。其處に幅のある日本彫刻史が出來るであらう。これは考へれば難しい問題である。が、さういふ問題もあるといふことを提案する、といふのであつた。實は私は會々その聽講席にあつて多大の興味を覺えたのであるが、やがて同席の一人から質問があつて、氏の方法は柳田國男氏一派の民俗學と相通ずるところあるやに思はれるが如何か、とのことであつた。私見を以てみるにそれは必ずしも同一方法とは斷じ難い。氏自らも亦明答を避けられたが、しかも私はひそかに、この質問の提起されたことの亦甚だ尤もなる所以を思うた次第である。

この丸尾氏の提案と、之に對する質問との間から、私は少からぬ暗示を與へられた。たとへば吾人は佛寺建築に於て漠然と飛鳥樣式などといつてゐるが、大和の法隆寺と尾張の甚目寺との間などには、恐らく樣式や手法の上にかなりの相異が存したであらう、と一應は考へられよう。が、また一面に於て、工匠の系統によつては、地域の距りにかかはらず技術上の類似といふことがあり得る。現に丸尾氏によれば、奈良時代特有の乾漆佛の一種なる木心乾漆佛についてではあるが、甚目寺の本尊がこの方式の漆乾佛であり、しかもこの方式は奈良地方特有で他の地方にあまり見られぬものである、と。この甚目寺は、今日では勿論早や飛鳥時代の佛は求むるに由なく、件の佛像の上に多少の手がかりはあるにしても、それも奈良時代のものである。或は、日本武尊の御足跡によつて暗示される如く、尾張と大和と兩地方の密接な關係は、既に太古以來のことであつたとすべきか。然樣なことが傳說や傳承のうちに窺はれはせぬか、等々。かかる問題のために民俗學を援用することも亦一つの方法たるを失はないであらう。同時に、民俗學もまた大いに美術史に學ぶところあらねばならぬ。とにかく偏狹な專門學的孤立は決してその道のためでない。

國と家

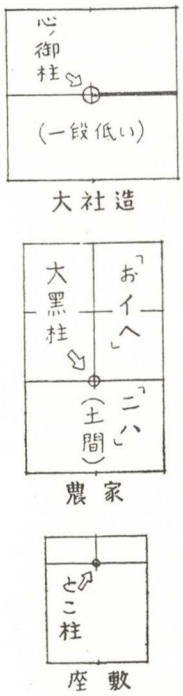
叙上の如く、緯の方向を強調して、言はば横の方向に氣を配るとなると、經の方向たる歷史の進行序列に支障を來すことはないか。年代的時間的方向こそ歷史の主軸である。横の擴がりは要するに空間的であり、人文地理學は成立しても歷史の成立し得べき領域ではない。いはんや民俗學の如きに歷史學と全くその方途を異にするものだ。道は必要以上の幅を求むべきでない。否、むしろ眞の道のためには「穿き門」より入らねばならぬ——といふことにもならう。一應は正にその通りである。私は茲に更めて斷らねばならぬ。

標題に示した如く、私は民俗學を以て日本建築史の「一方法」とすべきことを提言したのである。この提言を全面的に拒否するほどに、建築史學の方法は偏狹だとは信じない。翻つて思ふに、今日のわが建築史界は、その方法に於て完備し、その收穫に於て前途多望と見るべきであらうか。或は恐る、既に今日までに於て斯界の方法はその可能性を盡くしたのであるまいか。およそ如何なる方法にもあれ、その可能性を盡くした後に於いては、いはゆる行き詰りに立至るの外はない。たとへ其處までは立至らぬにしても、既に豊かなる收穫を終つた後に於ては、止むなく落穗拾ひの如き細部的穿鑿をせざるを得ない。或はまた、異常なる熱情が微細なる年數決定の上に傾倒される。遂に歷史學は考古學と合流して一筋の隘路にひしめき合ひ、また時には骨董趣味と區別なき迷路に立つに至る。せめてこの際、わが建築史の陣容は方向轉換を決行し、もつと廣い分野に向つて展開を試みては如何かと思ふ次第である。

卒直に言へば、私は先づ建築史をして一應年代記の束縛より解放せしめたい。もとより年代に對してはあくまで嚴正でなくてはならぬが、嚴正とは必ずしも微細を意味するものでない。細部的穿鑿は、さきにも一言した如く、よろしくこれを特殊な役所または國寶調査會の如きものに移讓すべ

きである。建築史をして、もつと吾人の日常生活に近きものたらしめよ。「家」の歴史的意義に觸れるところなき建築史が、果して眞に正しい日本建築史たり得るであらうか。求むる方向は家と國とを貫く一線にあらねばならぬ。

たとへば、吾人の住家の柱に注意せよ——今日普通の家には、とこの間があると假定して置く——この「とこ柱」、あるひは民家のいはゆる「大黒柱」、更に古典的な神社に於ける「心の御柱°」と



この圖は、柱を中心とする平面形式が、農家を中介として、古くは大社造に、新しくは近世住宅に一貫してゐるありさまを示したものである°この形式が如何に日本的性格のものであるかといふ事は、更に外國の場合と比べることによつて明瞭になると思ふが、本文ではさういふ問題には觸れなかつた。なほ説明不充分なところもあるが、大凡のことは、この圖によつて察してもらへると思ふ。敢て本文への補遺の意味で挿入する次第である。

れらは歴史的傳統に於て、決して互に無關係なものではない。また、古來わが國の神々は幾「柱」と數へられてゐる。柱の尊崇、柱による祭祀は國家的な「まつり」ごとのはじめであり、而して永く國民の民俗であつた。古事記によれば、伊邪那岐命・伊邪那美命の二柱の神々は、最初の國土としておのころ島を修理固成せしらめれた後「天之御柱を見立て、八尋殿を見立て」たまうたのである。何故に先づ御柱の御創建のことがあり、次いで御殿の御建造のことが記されてゐるが。御柱と御殿とは別々のものと考へらるべきであるか。實は今更事々しく論じ立てるまでもなく、既に本居宣長が古記傳に於いて注意してゐるところであるが、この天之御柱なるものは即ち心の御柱に外ならぬ。中心に先づ神靈のやどります柱が建てられる。古事記が、最初の神として「天之御中主神」の御名をあげてゐるのは意義が深い。太古の柱は堀立柱であつた。中心の柱が最初に建てられ、次いで爾餘の諸材が之を基準として配備される。かくの如きが太古の建築方式であつた。現にこのことは一に「建て初め柱」なる名稱の傳へられてゐることによつても窺ふことができる。而してこの傳承を荷ふものがいはゆる大黒柱である。古來農家にあつては家の中心柱に年神を祀つて豊年を祈つた。が、中世に及んで神佛習合の結果、ここに印度の厨房神なる摩訶迦羅天が將來された。この印度語を意譯すれば大黒天となる。やがて其處に大國主神が福の神として招請された。吾人は、ここにもまた、鎌倉時代といふ一期を置いて見てよいであらう。

かくて、天之御柱の精神は、その築建方式と共に、民俗と連つてゐる。即ち、國家の祭儀は國民日常の生活のうちに存在してゐるのである。かくて、家族國家たる日本の姿は言はば一本の柱に象徴されてゐるともいへる。

柱と壁

太古以來、柱はかくも神聖であり、而して、かくも現實的であつた。その力强さは、萬葉人をして「眞木柱、太き心」と言はしめた。この古代の心を、今吾々が追體驗することは困難ではないであらう。然るに、それよりも却つて新しい時代に於いて、今日吾々の常識を以てしては理解し難いやうな問題が起つて來る。

太平記に名文として有名な、俊基朝臣の東下りの中、菊川の宿の條に「一首の歌を詠みて宿の柱にぞ書かれける」とある。また平家物語の少將都還の條には「竹の柱、舊りたる障子などに書置かれたる筆のすさびを見給ひて……人の形見には手跡にすぎたるものぞなき」と嘆ずる場面がある——あまつさへ傍の壁にも書いてあつた……となると、その障子も壁も恐らく板で造つてあつたかと推定されるが——文面から、また現に「筆のすさび」といふ語から推して、これは要するに一種

のらくがきに外ならぬ。しかも墨筆を以て素木の上に直接書いたと解すべきであらう。これは今日普通の住居觀から見て、まことに異樣な風習であつたといはねばならぬ。そこで念のため古事類苑を調べてみたところ、柱に歌を書いたことが平安朝の歌人なる周防內侍に關しても傳へられてゐる由であり、また下つて吾妻鏡にも、釣殿の柱に和歌一首を註す、と見えてゐる。

また、源氏物語の眞木柱の條によれば、離緣の憂目にあへる悲しき母と共に住みなれた家を去りゆく姬君が、檜皮色の紙に一首の歌をしるして柱の干割れに笄でさし込みつつ、哀々切々の情を寄せてゐるのである。

斯やうなことが平安の都人たちの、言はば風流生活とでもいふべき一面であつたのだらうか。とにかく古代の柱の神聖觀とは相容れない態度のやうに思はれる。が、或は其處に何か咒術的意味でも含まれてゐたのであらうか。とすると古き柱の神聖觀に由來するところが無いとはいへない。蓋し、生產的な意味をもつた古代の祭儀の遺風が、何時しか都會人の有閑生活に於て神秘的な咒術に轉化したといふことはあり得る。而して、その轉化の契機をなしたのは眞言宗の修法の行事などにあつたのではあるまいか。

斯やうな觀念上の問題を別にして、柱がそれ自身現實的存在として、日常人々に親しまれてゐたことが、また源氏物語などに見えてゐる。即ち、かの「眞木柱」の話はしても——それは東面（ひがしおもて）の柱であつたが——實は姬君はいつもこれに倚りかかつてゐたのである。離別にのぞんで、このなつかしい柱を他人に讓つてしまふやうな氣がして悲しかつた。しかもかかる柱に對する愛戀の情が直接の動機で、歌の紙片をその柱の干割れにさし込んだといふのである。斯やうに、日常倚りかかる柱といふもののあつたことは他にも散見される。また須磨の條には、女が悲しみの淚を紛らすために、柱のかげに身を退ける樣子が描かれてゐる。かういふことは、今日普通の柱の細い、壁の多い家などからは想像し難いであらう。往時の寢殿造風の家にあつては、壁體や間仕切りは少く、言はば柱本位で、しかもその柱が太かつたといふことが考へられねばならぬ。

とにかく、平安朝の貴人たちの生活と近世の庶民の生活との間には、一つの肅然たる境界線があるやうに思はれる。何かしら一つの大いなる文化史的轉換期が其處に介在せねばならぬ。私は茲に文化としての茶の湯、建築として茶室、の發生とその影響といふ問題に注意せざるを得ない。この革新的な生活樣式が、いはゆる「お茶屋」に入り、町家に入り、更に農家にさへも入り來つたところに、近世の國民の生活樣式が育成された、と私は見るものである。そして、若しも上揭の文獻が示す如くんば——もとよりそれは更めて專門家の精査にまたねばならぬが——ここにもまた鎌倉時代といふ一期を置いて見るべきかと思ふのである。

柱や壁に直接文字を書く風習など、忘れられて既に久しい。このことは恐らく、床の間や掛物などの發生と關係があらう。同時に「とこ柱」なるものが家の最上位を占めることとなつて、ここに點で太古の心に返つたともいへよう。但し、構造體として退化し、裝飾的性格を强化し來つた點に問題は殘る。が、とにかく、さきにも一言した如く、家全體として柱の細く壁の多い——むしろ壁本位といひたいほど、しかも、壁といへば土壁と相場がきまつた、といふやうな——住家の樣式が何時のまにか出來上つてゐたのである。

「冷々と壁をふまへて晝寢かな」——これは言ふまでもなく芭蕉の句だ。もう斯うなると、家の神聖など說く方が顏負けである。無作法と風雅の道は膚一重、などいふ洒落ではあるまい。これでは建築の冒瀆ではないか——などと聞き直るとしたならば、お前は未だ禪的修業が足らぬとたしなめられるでもあらうか——が、かういふ句の生れるところには、其處におのづから建築樣式がある。さてその部屋の壁はたしかに土壁、仕上げは或はさびた大津壁などででもあつたらうか。寢ころんだとすれば床は既に疊敷だつたと見てよいだらう。柱のことなど不明だが、細いものだつたと假定して置かう。時は元祿。所は近江の粟津の無名庵とある。別に大津の醫家木津亭の茶會での「秋近き心よするや四疊半」といふ句もあるほどだから、私はこの都に近い僧庵に狹い茶室風の部屋を想像する。それは寢ころぶと自然に足のうらが壁に當るといふ程であつたのだらう。私はここに芭

蕉の句を介して茶室を眺める。二者は共に同じ風雅の一筋につながる藝術であつた。

ところで芭蕉はその藝道のために「寂(さび)・撓(しを)り・細(ほそ)み」を說き、また「輕み」をも說いた。また別に「俳諧は萬葉集の心なり」とも說いてゐる。だからその「細み」や「輕み」はこの俳聖の心に於ては、萬葉的な眞木柱の「太き心」に通ふものでなければならぬ。が、いはゆる利休出でて茶道亡び、芭蕉出でて俳諧亡ぶ、で、江戸時代の町人文化の下にあつては、いはゆる宗匠たちは、要するに「古人の跡」を求めたにすぎない。これを建築について見れば、柱や長押など、文字通りの「細み」や「輕み」を單なる形式として表現したに外ならぬ。かくて茶「趣味」の建築が「流行」したのである。

が、かくの如きは、要するに泰平逸民の閑間題である。閑人が茶を樂しんでゐる時、農民は營々として働かねばならなかつた。農家は「藝術」であるよりも「現實」である。それ故に、農家には未だ太古以來の逞しい傳統が殘つてゐた。が、それもやがて失はれる時が來よう。早くもこの點に着眼せる民俗學先達の慧眼とその功績とに對し、私は茲に更めて敬意を表したい。

叙上私は、柱と壁とを主題として二三の推論を試みたが、しかもこれを敢てしたのは、思ふに、同じ一本の柱にしても時代により所により、之に對する人々の心境や態度に夫々異なるところがあるからである。その心境・態度の相異に應じて、建築の現實態もまたなると見ねばならぬ。而して私の念願とするところは、本篇に於ては未だ果すを得なかつたが、その心境・態度を通して建築の現實態を求めようといふにある。その方法としては——民俗學、乃至美術史に於ける緯の問題等の外に——更に文學的文獻の間接援用を試みた次第である。思ふに、たとへば榮花物語などに法成寺建立のことが見えてゐるが、これをそのまま直接建築史の一項として引用することは、要するに個々特殊の事跡を報告するにすぎぬ。これに對して文獻の語るところ必ずしも事跡そのものにはあらずとするも、其處に時代の性格的風尙を看取し得るならば、これを歷史的眞實として迎へたい。もとよりその判定は容易でない。が、その意圖するところは個別的・特殊的なものよりも一般的・全體的なものを求めるにある。但し、座右資料乏しく、止むなく少許の記憶をたどつて當座の思ひつきを述べたことは自ら危惧の念にたへない。いはんや初より民家の問題を標榜しながら、その述べたところは多く都會有閑人の上にあつたことは何とも申譯ない次第である。

鎌倉時代と現代

さて、この邊で談議は一應打切らうと思ふが、私は茲で更めて結論を述べようとは思つてゐない。結論は實は最初から標題中にうたつて置いたつもりだ。むしろ、私の意圖したところは問題の提案にある。が、その問題にしても、民俗學にしろ、緯の問題にしろ、みな先學諸家よりの借用である。その間に、せめて多少なりとも私一己の問題を求めよとならば、先づ「方言と民家」の類比から出發したといふ點、次いで鎌倉時代といふ特殊な一時代に逢著したといふ點にあるかと思ふ。が、茲に更めて本稿を草するに至つた一つの動機に關して附言したい。

私は敢て時局に便乘せんとするわけではないが、ひそかに考へるに今日の事態は、少くとも文化的動向に於て、何所かしら鎌倉時代に彷彿たるものがありはせぬか——といふと如何にも投機的に響くであらうが、歐語に SPeculation といふ語がある。今は暫くその位の意味にても止むを得ない——たとへば、昨日まで都市計畫といはれてゐたのが、今日では國土計畫として再出發すべきことが要請されてゐる。このことは文化一般の問題に對しても甚だ象徵的である。從つて無意識のうちに都市本位であつたところの建築觀の如きは旣に淸算されねばならぬ時が來てゐる。私がここに鎌倉時代といふものを省みたい所以である。而してこれを契機として「方言と民家」の問題を考へてみた次第である。

が、更に私は、今日の國運に照應する意味に於いて、民家の研究が新しい意義をもつべきことを注意したい。といふのは、日本建築の歷史的系統の問題は、日本語の問題が然るが如く、依然として懸案のままである。來るべき建築史の重要なる課題の一つは、日本の民家の樣式を、この大和島根を取りまく諸民族の住居樣式との關聯に於て解明する、といふ點にあるのではあるまいか。

（18.10.8）

（筆者は　神戸高工建築科敎授）

古典に現れた建築の解釋

藤田德太郎

主として上古の古典に現れた建築について、聊か解說を加へてみる。もとより、古典においては特に意識して建築の狀態を說明しようとする意圖のもとに、表現をしたものはないから、その內容は不十分であり、又、不關明であつて、これだけでは、建築の樣樣をうかゞひ知るには、甚だ不明瞭なるを免れないが、併し、幾分かは、上古の建築を考へる上に役立つこともあらうかと思ふ。

上古の古典に見える建築の上の言葉として最も頻繁に現れるのは、

〝底つ岩根に宮柱ふと知り、高天原に氷木高知りて居れ〟（古事記）

と云つたやうな表現で、〝氷木〟は又〝千木〟ともある。即ち祝詞には、

〝皇神の敷坐す、下つ磐根に宮柱太知り立て、高天原に千木高知りて、皇御孫命の瑞(みづ)の御舍(みあらか)を仕へ奉りて〟（祈年祭）

と見える。〝氷木〟も〝千木〟も同じ語で肘木のヒヂの語が二分して、この兩語になつたものであるといふが、恐らくいづれかの一方が元の語で、他はその語が轉訛したものであらう。

これらは、上古の宮殿をほめたゝへる時に用ひる、きまり文句となつてゐるが、〝下つ岩根に宮柱太知り立て〟は、その建築の堅牢なることを意味し、〝高天原に千木高知りて〟は、その建築の高壯なことを意味する。而して、〝下つ岩根に宮柱太知り立て〟は、地下の岩盤の上に大黑柱を建てて、柱の沈下することを防いだものであり、〝高天原に千木高知りて〟は、天にも屆くほどに千木を高く聳え立たせたもので、裝飾的意味もあるが、上古においては釘がなく、繩をもつて木材と木材とを結び合せた關係上、屋根の兩端において斜に交差させた木材の先端が上方に突出することは當然であつて、一面においては、この千木の先を長く殘すことは、威嚴を添へる他、修理その他に便宜を與へ、且つ建物を堅牢に保たしめるのである。

千木は、元來、この用途の木材全體を稱する名であつたが、後、屋根から先に突出してゐる部分だけが分離して、屋根の上部に着いてゐるものを千木と稱し、その下は即ち搏風であるが、上古においては、千木の所もやはり搏風と稱したのであつて、日本書紀には、

〝太立宮柱於底磐之根、峻峙搏風於高天之原〟

と書いて〝底つ磐根に宮柱太しき立て、高天の原にちぎたかしりて〟と訓ませてをり、搏風の文字を、ちぎと訓むのであるが、又、下の方の本當の搏風に對して、この千木の部分を上搏風とも云つてゐる。

柱を地中につき立てるについて、特に中心となる親柱は、建築の根本となる重要なものである。これを神代では天の御柱と云つた。古事記に

〝其の嶋に天降り坐して、天の御柱を見立て、八尋殿を見立てたまひき〟

〝吾と汝と、是の天の御柱を行きめぐり逢ひて、みとのまぐはひ爲せ〟

と見える〝天の御柱〟がそれで、天の御柱を立て、これを中心として八尋殿、即ち、廣大な家が建築せられるのである。

神武天皇が、豊國の宇沙においでになつた時、土地の人が、足一騰(あしひとつあがり)の宮を作つて供御を差し上げたといふことが古事記に見えてゐるが、この足一騰の宮といふのは、中心に柱を一本立てて、この親柱の周圍に屋根を葺き下した建物を稱するのであらう。即ち足一騰といふのは、天の御柱に通じる意味であらうと解される。これを、四隅の柱の中、一隅だけが川の中に立ててある建築であるとか、一足で上れるやうな低い床の家であるとか

解する説もあるが、當つてゐるとは思はれない。

屋上には千木とともに鰹木がある。これは、その形から出た名稱であるが、もとは、屋根に葺いたものが風で飛び散らないやうに乘せて置いた重りの具であることは云ふまでもない。これについては、古事記の雄略天皇の條に、

〝山の上に登りまして、國望しせれば、堅魚を上げて作れる家あり。天皇、其の家を問はしめ給はく、其の堅魚を上げて作れる舍は誰が家ぞ〟

と出てゐるが、この時代には鰹木は立派な裝飾となつてゐたので、普通の人々が鰹木を設備することは甚だ豪奢な建築を見なされたやうである。從つてそれは最早、單に風で飛び散ることを防ぐための實用的な用途のみにとどまらない。この當時の千木も亦同樣の性質を持つものとなつてゐた。

更に、上古の建築を詳細に記したものは祝詞の大殿祭である。

〝此の敷き坐す大宮地、底つ磐根の極み、下つ綱根這ふ蟲の禍無く、高天原は靑雲の靄く極み、天の血垂り飛ぶ鳥の禍無く、掘竪てたる柱、桁、梁、戸牖の錯ひ動き鳴る事無く、引き結べる葛目の緩び、取り葺ける草の噪ぎ無く、御床びの喧ぎ、夜目のいすすき、いつつしき事無く、平らけく安らけく護り奉る〟

と神に奏上するのである。ここに〝下つ綱根〟とあるのは、床下の柱や横木を結び合せるために用ひる綱のことを云ひ、即ち、釘を用ひず、綱でもつて木材を結び合せたのである。掘り立てた柱や、桁、梁、戸窓の類が木材と木材の接着してゐる箇所においてすれあひ動き鳴ることのないやうに、又、木材と木材とを結び合せた綱が緩んだり、屋根に葺いた草がそゝけて飛散したり、或は床を踏むたびにぎしぎしと音をたてたりしないやうに祈る詞である。〝葛目〟と書いて、〝つなめ〟と訓ませるのは、即ち、葛蘿の類をもつて、木材を結ぶ綱に使つたからである。なほ、〝夜目のいすすきいつつしき事〟は、夜寢た時、あわてさわぎ、そゝぎまはることを意味し、即ち夜うなされたりすることを云ふ。

次に、日本書紀顯宗天皇卷に記した室壽詞も亦、當代の建築を想察するに足るものがある。

〝築き立つる稚室葛根、築き立つる柱は此の家の長の御心の鎭なり。取り擧ぐる棟梁は此の家の長の御心の林なり。取り置ける椽橑は此の家の長の御心の齊ほれるなり。取り置ける蘆蕝は此の家の長の御心の平かなるなり。取り結へる繩葛は此の家の長の御壽の堅きなり。取り葺ける草葉は此の家の長の御富の餘りなり〟

〝稚室葛根〟は、綱をもつて結び固めた家を常若の家とほめたたへ、更にその家の細部を家の主人の心に譬へて柱、棟、梁や、椽橑をあげたのである。椽橑は〝たる木〟又は〝はへ木〟と訓じる。即ち垂木或は延木の意で兩者は大體同じものの名稱であると思はれる。蘆蕝は〝えつり〟と訓み、屋根を葺く下地となるものを云ふ。即ち、これらの名稱が示す部分で家屋が出來てゐたことがわかる。家屋には戸や窓があり、又、竈が設けられてゐたことは云ふまでもない。これについては、古事記の神代卷に、

〝高天原には、神產巢日御祖命の、とだる天の新巢の凝煙の、八拳垂るまで燒き擧げ、地の下には底つ石根に燒き凝して〟

と見えるが、地の底の石に燒き通るまで火を燒いて食物をつくるのは、地を掘つて竈が作られてゐたことを示し、特に土を塗り固めた竈があつたわけではない。而して、その竈から立ち登る煙が屋根を貫いて出るやうになつてゐるところを巢と云つたのであつて、即ち煙出しである。但し、後世のやうに煙突があつたのではなく、竈の上方の屋根が蘆蕝（えつり）だけで何も葺いてなく、その蘆蕝を通して煙が出で去るやうになつてゐたものであると解せられてゐる。それで煤が天井から長く垂れ下るのを、〝八拳垂るまで燒き擧げ〟と表現し〝とだる〟といふ語も富み足るの意で、食物を作る場所の立派なことをほめたたへたものである。

併し、一般に家屋の簡素なことは、萬葉集卷八の元正天皇の御製に、左大臣長屋王の邸宅をお詠みあそばされて、

〝旗薄尾花逆葺き黑木もち造れる室は萬代までに〟

と仰せられてをられるのでも思ひみることが出來

る。旅薄は即ち尾花のことで、その薄で屋根を葺き、黒木、即ち皮つきのままの木材で作られた邸宅が即ち長屋王のお住居の様である。もとよりこれを葛蔓で結び合はせたものと思はれるから、その粗末なことは想像するに餘りがあるであらう。

上古の建物が黒木であつたことは、萬葉集巻四の大伴家持の歌に、

〽板蓋の黒木の屋根は山近し明日の日とりて持ち参り來む〽

とも見えてゐて、この歌によると、屋根を作るのに黒木を用ひたのである。又、その屋根は板葺であつた。これを板屋と云ひ、平安時代の作品でも源氏物語に、

〽八月十五夜くまなき月かげ、ひま多かる板屋殘りなく洩り來て〽（夕顔）

〽八月、野分の荒かりし年、廊どもも倒れ伏し、下の屋どものはかなき板ぶきなりしなどは、骨のみわづかに殘りて〽（蓬生）

などと見えて、いかにも貧しくはかない家屋のやう描かれてゐるから、板屋は立派な住宅には用ひられなかつたものと思はれる。〽黒木の屋根〽は、その板屋の上に、風に吹き飛ばされないやうに載せる木材が黒木であると解するものもあるが、むしろ屋根を構成してゐる木材が黒木であつたと見るべきであらう。但し、それは平安時代の狀態で、上古においては、立派な宮殿においても板屋根が用ひられたのである。皇極天皇の御時、飛鳥板蓋（いたぶき）の宮を定め給うたのも、その宮が板ぶきでましましたことを示してゐる。即ち最も古くは草葺であり、次に板葺を用ひられるやうになり、更に下つて奈良時代の頃には瓦葺が相當に普及して來たのである。

なほ、萬葉集巻二に天智天皇の御不豫の際、皇后の奉つた御歌に

〽天の原ふりさけ見れば大君の御壽（みいのち）は長く天たらしたり〽

と見えてゐるが、これは普通、空を仰げば、聖壽の足り滿ち給ふこと大空と共に窮りなき祝意をこめられた御作と解されてゐる。併し又、前に掲げた顯宗天皇紀の室壽詞に、〽取り結へる縄葛は此の家の長の御壽の堅きなり〽と照らし合せて考へれば、〽天たらす〽は天垂らすの意と解され、即ち屋根を作るために用ひた綱の結び餘りが長く屋上より垂れ下つてゐる有様をもつて、聖壽の長久によそへ奉つた御歌と解釋する説もある。然らばこの御歌のごときも、當時の家屋のさまを髣髴とさせるものがあるかと考へられる。

（筆者は浦和高校教授）

電燈、電力各工事請負
照明器具製作販賣
電氣機器加工修理

共立電氣商會
市川正三郎
大阪市南區問屋町12番地
電話南㉕5788番

新都市と新農村

山田正男

（I）

都市と農村、都市社會と田舍社會は、我々の社會を構成する二つの分子である。都市社會と田舍社會とが如何なる形で存在し、如何なる形で組合され、如何なる形で交渉しつゝあるかと云ふ事はその各々の社會自體は勿論、夫等に依つて構成される單一社會——狹域的に見ても、廣域的に見ても——の發展を、永遠に決定的に左右するであらうと云ふ事が出來る。それは、或る場合には國內動亂の原因となり、又或る場合には戰爭を誘發したのである。勿論之は都市社會と田舍社會との單一社會に對する對立的なる宿命的役割に起因して居る事は云ふ迄もない。此の兩社會は果して永久に對立せざるを得ないであらうか。

大東亞戰爭遂行下に於て、戰力增强、生產力增强を目標とした大工場が、國土計畫乃至は地方計畫、或は都市防空の見地から、大都市乃至は過大都市から遠隔の全國各地に建設されつゝあるが、工場並にその附屬施設の敷地としての、或は之に伴ふ都市建設に依る農耕地の潰廢、或は農業勞働力の吸收等に基く農村機構の破壞、ひいては農村の壞滅は、農村の側から、或は農業人口を確保せんとする人口政策の立場から、或は食糧問題の立場から議論の的となつて居る。工業生產力擴充の爲に、工場の建設、擴張の緊急なる事は、言を俟たない。從つてその爲に農耕地の潰れるのは當然である。勿論、食糧增產、食糧確保の點から云へば、1坪の農耕地と雖も確保したい處ではあるが之は大東亞戰爭遂行上止むを得ない現象と云ふべきであらう。寧ろ我々は積極的なる開墾、干拓等に依る農耕地の開發へと進まなくてはならない。吾々の憂慮すべき問題は工場設置に依る農村機構の破壞、農村の破滅である。之は工業と農業の問題であり、都市と農村の問題である。或は之は都市に依る農村の侵略と考へられるかも知れない。何となれば都市經濟を代表するものは、工業であり農村經濟を代表するものは農業であるからである。

更に眼を廣く地球全般に轉ずれば、大東亞戰爭と云ひ、第二次歐洲戰爭と云ひ、何れもその單一社會に於ける都市社會と田舍社會との配置、配合の如何が原因であるとさへ考へられるのではなからうか。何故ならば、兩社會の分化が田舍社會は都市社會に原料を供給し、都市社會は田舍社會に製品を販賣せしめるに立ち到つたからであり、實に資源戰爭と呼ばれる所以も此處にあるのである。

斯くの如く、都市社會と田舍社會との分化對立その配置、配合の適性化は、局部的な一地方に就いて見ても、世界全般に亘つて見ても、その各々の社會の合理的發展を達成する上に、最も緊要な問題である。更に現實的に云へば、第二次世界戰爭の解決後の姿も、大東亞共榮圈確立の形も、或は大東亞戰爭を完遂せしむべき、又大東亞共榮圈の中心基地たるべき日本內地の構成も、すべて都市社會と田舍社會の合理的構成にあると云ふ事が出來よう。

而も過去並に現實に於て、我々が見て居るものは、都市社會と田舍社會の對立の歷史であり、或は更に前者に依る後者の征服の姿である。我々は都市社會と田舍社會の現實の構成を肯定し得ないと同時に、現實の都市社會並に田舍社會そのものに最大の不滿を感ぜざるを得ないのである。我々は兩社會の合理的配置を期すると同時に、兩社會そのものゝ本質的な機構に根本的な改革を行はなくてはならない。

（II）

それでは合理的なる都市社會及び田舍社會の機

構並にそれらの合理的配置配合とは如何なるものであらうか。我々はその問題を追求する前に、過去並に現在の都市社會並に田舍社會の本質を分析しなくてはならない。

現在、都市社會と田舍社會とは、その職業的構成に於て、經濟的構成に於て、環境、人口密度、自活體の規模、人口の質、社會的分化等に於て全く異つて居る。更に具體的に云へば、田舍社會はその大部分が原始產業——農林、漁、鑛業——に從事する人々並にその附隨人口に依つて構成されて居るが、都市社會は田舍社會から獲得した原料の加工及びその製品の販賣に從事する人々並にそれらの附隨人口に依つて構成されて居る、從つて都市社會の經濟の主體をなすものは、商工業であるのに對し、田舍社會の經濟の主體をなすものは原始產業、主として農業である、田舍社會は都市社會に食糧その他の原料を供給し、都市社會は田舍社會に對し製品を供給するのである、此處に都市的機能と田舍的機能の本質的差異が存するのであつて、此處から他のすべての分化的派生的の特徴が發生したものと見る事が出來る。即ち、密集せる建築物、稠密なる人口、林立する煙突、錯綜せる交通網、其の他の所有する都市的景觀から育まれた都市人的思想、都市的文化、之等はその善惡は別として餘りにも田舍のそれとは隔絶したものである。

勿論、斯くの如き都市社會が昔からあつた譯ではない、都市社會は田舍社會から分化せるものである。斯くの如くに迄都鄙を分化せしめたものは產業革命に依る資本主義的產業の發展であつた。本來の田舍社會は都鄙分化後の夫れとは異り、全くの自給自足的の單一社會であつたが、都鄙の分化は必然的に田舍社會から之を奪つてしまつた。田舍は都市に人と食糧と原料とを供給し、都市は田舍に製品を販賣すると云ふ都鄙の分業的關係を生じた。本來の田舍社會は單一社會であつたが、之から分化した都市社會（工業的社會）、田舍社會（農業的社會）は嚴密には單一社會ではない、兩者合して始めて單一社會を形成して居ると見るべきであらう。從つて兩者の間には、人と物を通じて多かれ少かれ絶えざる交流があつた。（之は或る時には都市の滅亡と云ふ形であらはれた事もあつたが、產業革命以後に於ては專ら都市に依る田舍の征服と云ふ形をとつて來た。此の結果が本來の國土計畫乃至は地方計畫への必然的原因となつたのであるが、最近に於ては都市に對する空襲に依つて受ける甚大なる被害に直面して、漸く都市人口の田舍への疎散乃至は移住、工業の地方分散と云ふ形をとつて現はれつゝある。——之に就いては後に述べる。）而も都市人口と農村人口との間には、餘りにも大きな相異が認められる。之は勿論先に述べた様な都鄙兩社會の根本的に對立的な社會構成、社會機能、社會現象に依る必然的な結果である事は云ふ迄もない。

第一に農村人口は都市人口に比して、社會心理的に遙かに同質的である。農村人口は農村社會の經濟的基礎である農業その他の原始產業の本質上土地と密接に結びついて居る。土地に定着する事に依つて所謂鄉土を形成して居る。從つて農村人口は言語、風習、その他所有する社會的通念が一様であり、之等に依つて育まれた鄉土的精神に依つて堅く結ばれて居る。此の鄉土的精神こそ、土に依つて育まれ、土に依つて結ばれた共同的精神である。農村會社は斯かる鄉土的精神に依つて結ばれた共同社會（Gemeinschaft.）である。

之に反して、都市人口は都市そのものゝ本質上各地からの流入人口の集合であり、而もそれは常に新しい流入人口に依つて更新されつゝある。從つて都市社會は各地からの流入人口の集合體に過ぎない。都市人口は都市社會の經濟的、社會的基礎である工業乃至は商業の本質上土地とは全く關聯がない。都市人口の役割は唯原料を購入し、之を加工し、變形し、之に依つて得た製品を販賣すればよいのである。之等は單に利潤の分配に依つて結びつけられて居るに過ぎない。資本主義に依つて育まれた都市社會が、利潤追求の必要上農村社會に比し、遙かに多くの社會的分化が起つたのは當然であらう。都市人口の間には彼等を結びつけるべき鄉土的精神がなく、又斯かる共同的觀念を育むべき何ものもない。都市社會は資本主義的經濟觀念に依つて結ばれた利益社會（Gesellschaft）である。此處に兩社會の根本的な相異があるのである。

（III）

斯くの如く本質的相異る兩社會が單一の社會を

形成する場合、兩者の交流が狹域的にも或は廣域的にも圓滑に行かないのが當然かも知れない。何れにしても過去及び現在の歷史的段階に於ては、之は極く稀なる例外を除いては、產業革命以來都市の無限の膨脹、農村から都會への絕えざる人口流入——その原因は兎も角として——となつてあらはれつゝある。從つて此のまゝの勢で行けば、現代の社會は益々都市化し、農村社會乃至田舍社會は次第に消滅するのではなからうか。而も我々は都鄙兩社會の單一社會に於ける本質的役割、並に兩者の不可缺的相互作用を否定する譯には行かない。都鄙兩社會は狹域的にも又廣域的にも相互に他を相補ふ事に依つて始めて、單一社會を構成し得るのである。何となれば、田舍は都市に食糧と原料と人口とを補給し、都市は田舍に製品と文化とを補給するからである。農村の都市化の傾向を認め。而も都鄙兩社會の本質的分化を容認せざるを得ないものとすれば、將來の兩社會は如何なる形を取るべきであらうか。之に對する解答は唯一つしかない。即ち、農村は都市化すべきであらう。之は農村に都市的役割の幾らかを與へ、農村に都市的文化をも與へるであらうから甚だ觀迎すべき事である、然し農村が都市化したものとすれば、農村はそれだけ農村自身の農村的役割を負擔する譯にはいかないであらうし、都市はそれだけ都市自身の都市的役割を負擔しなくてもすむ代りに、それだけ農村的役割を負擔しなくてはならない事となる。換言すれば、都鄙の差異は激化するかの如くに見えるが、之は事實は從來の如き都鄙兩社會に見るが如き差異は消滅して、從つて從來の都市社會、農村社會は農村化したる都市乃至は都市化したる農村に代るのではなからうか。之は農村自體の都市的文化的向上を意味する以外の何ものでもない。農村化したる都市、都市化したる農村、斯かる新時代の社會的分化こそ、從來の都鄙兩社會の矛盾を是正すると同時に、都鄙兩社會の本質的對立を解決するものであらう。

それでは實際問題として歷史的段階に於て、都鄙の分化は增大しつゝあるのであらう、又は減少しつゝあるのであらうか。之は狹域的——一地方又は一國內——にも、廣域的——地球全般から見て例へば西洋と東洋は都鄙兩社會の代表的なものである。——にも、本來都鄙の分化は全くなかつたが、分化の發生と共に之は拋物線的に增大して頂點に達し、其の後は拋物線的に減少しつゝある。歷史的に見れば、歷史の最初の段階に於ては勿論かゝる分化は起らなかつたし、又古代以後分化は起つても、それは極く僅かなものであつた。都鄙の分化を增大ならしめたものは產業革命に依る資本主義的產業の繁榮である。而も鄙都の分化を增大せしめるかの如くに見えた產業革命自身もそれ自體の中にその後期に於てはその分化を稀薄ならしめ、都鄙兩社會の相互的な半農半都市化を達成せしむべき諸種の力を包含して居たのである。此の兩社會分化の微弱化は、勿論都市の農村化よりも農村の都市化の方向に於て、より多く進みつゝあるのは、兩社會の文化の性質上當然の事である。狹域的に見れば、歐米諸國に於ても、亦我が國に於ても——多少テンスが遲れて居るではあらうが——廣域的に見れば、東洋と西洋との間に於ても、都鄙分化は最早此の最後の段階に進みつゝあると考へる事が出來る。唯、古代の歷史の二三の場合に於ては、例へそれが天變地異の結果であつたとは云へ、都市社會の衰亡として、逆に都市の農村化に依る都鄙分化の微弱化が行はれた。之は勿論、例外的な場合に過ぎないのであるが、必ずしも例外のみと考へる譯にはいかない。何となれば、大東亞戰爭乃至は第二次歐洲戰爭下に於て、都市に對する空襲は或る意味に於て都市の衰亡を招來し、實際問題として都市人口の農村への疎散乃至は移住、工場の農村への分散乃至は移設となつて實現しつゝあるからである。——而も、之こそ都市計畫乃至は地方計畫、國土計畫に至る一聯の計畫體系の企圖しつゝある事が、偶然とは云へ戰爭に依つて實現されつゝあると見るべきであらう。之は明かに都市の農村化の現象であるが、斯かる現象は反面に於て農村の都市化をより強く誘引しつゝある事も疑ひない事實である。——之こそ、冒頭に述べた現下の都市と農村、工業と農業の過渡的な又或る意味に於ては本質的な摩擦であり、相剋なのであるが。之は自然の趨勢である。都鄙の分化は、斯くの如く農村の都市化と都市の農村化の相互作用に依つて微弱化して行くのである。之は決して往々考へられる樣な都市

に依る農村の征服でもなければ、農村の衰亡でもない。唯、社會の分化が都鄙の分化の代りに、半農半都市化に移りつゝあるのに過ぎない。然し斯かる半農半都市化の、より強い、より繼續的な傾向は、一見都鄙分化の增大、都市に依る農村の征服を示す徴候の如く見られて居た、都市人口の增加に對する農村人口の固定又は減少、農村人口の絶えざる流入に依る都市人口の著しき膨脹、農村に於ける全職業人口に對する農業人口の比率の減少——之は農村人口が農業から各種の都市的職業への移行しつゝある事を如實に示すものである。——等の諸現象の中に、都市の農村化と農村の都市化の相互作用として或は弱く作用しつゝあるのである。即ち、農村人口の都市への流入に依つて、都市は農村から健康なる空氣と血液と文化とを吸收した、農村人口の減少的傾向に反し、都市人口は著しく膨張して居る、從つて都市の食糧並に原料の需要量も增大せざるを得ない、農村人口の減少にも拘らず、農村は都市により多くの食糧と原料とを供給して居る、之は農業の機械化、集約化に依る多角經營に負ふものである、之は必然的に農村の職業人口の分化を招來し、農村人口の職業構成は次第に都市的構成に近づき、農業人口の比率は減少の一歩をたどらざるを得ない、之こそ農業の工業化、農村の都市化でなくて何であらう。此の間に存在する各種の交通機關、通信機關も亦兩社會の交流、兩社會の一體化に大きな役割を果して居る。斯くして都市並に農村の半農半都市化は夫等自身の知らず知らずの中に、夫等自身が果して來たと見るべきであらう。

而も斯かゝる都市並に農村の半農半都市化の傾向は、それ自身の本質上都鄙兩社會の偏在をも微弱化するであらうと云ふ事を附言しなくてはならない。半農半都市化的社會に於ては、狹域的にも廣域的にも、都鄙偏在の微弱化も亦都鄙分化の微弱化に附帶した自然の趨勢である。斯かる自然の趨勢こそ、將來の都市と農村の形態を暗示するものである。

(IV)

斯くして半農半都市化は自然の傾向であると云ふ事が出來る。然し都市が農村の健康なる空氣と血液と文化とを夫自身の中に咽嚥し吸收してしまつたのに反し、農村の都市化、農業の工業化は農村の社會的經濟的文化的機構並に農村人口そのものに著しい影響を與へた。——之が冒頭に述べた農村機構の破壞、人口の弱體化として、農業乃至は人口問題の側から憂慮されて居る點なのであるが。然し之は可否の如何に拘らず自然の趨勢であると同時に、農村の都市化は都市よりも農村自身が無意識の中に夫自身で果して居るのである。農村は共同的自給自足經濟から都市の市場經濟、貨幣經濟へ轉換した。農村は都市の市場に食料並に原料を販賣する代りに、都市からその製品を購入する樣になつた。此の事は農村經濟全般に亘つて一聯の根本的變化を惹起したのである。農村も亦都市と同樣資本主義經濟の一環をなすに至つた。農業も亦都市の工業と同樣資本主義的な企業經營の形をとる樣になつた。從つて工業と同樣、利益を主體として分業化し、集約化し、機械化した。斯かる農村自身に依る農村の都市化は農村の經營機構に根本的變形を與へたのみでなく、農民精神農民文化に著しい變革を起しつゝある。農村の職業構成の都市的分化も亦此の點與つて力がある。農村のみの持つ美點であつた共同的精神並に之に依つて育まれた鄉土的文化は失はれて、都市の個人主義並に個人主義的文化に代りつゝあるのみでなく、ひいては農村人口の弱體化(都市人口的)へと進むであらう。斯くの如く半農半都市化は常に資本主義的副作用を伴つて居る。然し農村の都市化が惹起する之等の一聯の諸影響は、世上杞憂される樣な農村の都市化に對する拒否の理由にはならない。問題は何も農村にのみ限られたる問題ではなく、廣く都市と農村とを包含した全社會の問題である。我々は舊態的な農村機構の保守に期待する譯にはいかない。我々は農村人口の弱體化を問題にする前に、都市人口的弱體化そのものに確固たる對策を講じなくてはならない。寧ろ我々は全社會を風靡しつゝある資本主義乃至は個人主義並に之から派生する諸事實及び諸影響に其の原因を求めるべきであらう。而もイデオロギー及びその與へる諸影響の如何に拘らず、農村の半農半都市化は畢竟自らの作用に依つて必然的に累進して行くであらう。

(V)

それでは將來の半農半都市的社會は如何なる形態をとるべきであらうか。それは資本主義的副作用を伴はない社會でなくてはならない。そこで斯かる新社會は、資本主義乃至は自由主義、個人主義の否定されつゝある今日、始めて可能なるものである。勿論此處で云ふ半農半都市的社會とは、都市と農村の分化の消滅した社會を云ふのではない。斯かる社會は或は理想的社會形態であるかも知れないが、恐らく農業並に工業の本質上恐らく學問上のユートピヤとしてしか存在し得ないであらう。從つて都市と農村の分化を全然消滅する事は出來ないであらう。我々の期待する半農半都市的社會とは、都市と農村とが最も均一に最も緊密結合し、渾然と融合し一帶化した細胞組織的な社會であり、之は出來得る限り農村化した都市と出來得る限り都市化した農村の組合せに依つて構成された社會である。斯かる社會に於て始めて、過去に於て分離してしまつた土地と人口とを、その各々の産業と文化とに依つて、再び永遠に結合する事が出來るであらう。斯かる社會に於ける都市農村兩社會は最早過去に於けるが如き利益社會でもなければ、單なる共同社會でもない、都市と農村とはその利益に於ても共同的精神に於ても密接に結合して居る共同利益社會である。成る程、農業が如何に機械化されたとしても、農業と都市的工業との本質的差異を除去する譯にはいかない。從つて都市社會と農村社會、都市人口と農村人口との環境的差異を消滅する事は出來ない。從つて強ひて云へば、前者は Gemeinschaft 的 Gesellschaft（共同的利益社會）、後者は Gesellscheft 的 Gemeinschaft（利益的共同社會）とも云ふべき差異はあるであらう。然し兩社會の配置、配合が適切であるならば、兩者の均衡を得た相互交流作用に依つて半農半都市的社會は益々ユートピヤへと近づくであらう。此の爲には都市と農村の需要供給が均衡しなくてはならない。斯かる社會に於ては、廣域的にも狹域的にも都市と農村の偏在は許されない。斯くて農村は都市に必要にして充分なる食糧と原料を供給し、都市は農村に必要にして充分なる製品を供給する事に依つて、兩社會は半農半都市的なる單一社會を形成するであらう。斯かる配置、配合を決定するものは、アウタルキーである。之は廣域的には例へば大東亞共榮圈であり、狹域的には季末、月末、週末乃至は日常生活圈である。故に廣域的にも狹域的にも自給自足經濟圈の形成こそ、新時代の都市と農村の任務であり、斯かる新都市、新農村の形成こそ、國土計畫乃至は地方計畫の任務である。

（筆者は大阪府都市計畫委員會技師）

土木建築請負業

盛工務店

營業所 大阪市北區地下町十五番地
電話 堀川㊽一四二九番

工場勞務者厚生施設

平岡正夫

1. 序　　言

抑々近代機械文明の與へた最大なる缺陷は、吾々の周圍から自然的環境を遠隔させた事である。人類が大自然を忘却して無秩序、雜沓的な生活をなすを以て文明なりと誤認し、無味乾燥なる人工の砂漠とも云ふ可き大都市を誇らしげに形成させた自由主義的な文質文明は、特に工場に於て、騒音と惡瓦斯と塵埃の中にあつて疲勞を覺えぬ機械に引摺られて兎角過勞に陷り勝ちの勞務者から、無慈悲にも人間生命維持の要素たる紫、菫外線に豊める日光、新鮮なる空氣、豊かなる大地の惠み綠地帶等を隔絶させて顧みなかつたのである。されば工場とは、所謂殺風景にして混雜と危險、不潔と不衞生なる場所の代名詞の如き先入感をさへ世人に與へてしまつたのである。

然るに現今、生産增强を絶體的緊要とする長期戰體制下に於ては、先づ何よりも工員の健康增進及び擁護を目標としたる肉體的錬成を第一條件とし、團體的統制、精神的訓育に對する施設、方針を充實させる事の程度如何は直接工場に於ける生産能率に影響を及ぼす重大關心事である。即ち從來行はれてゐた勞務者の消極的保健に止まらずして更に積極的體錬訓育に忍從せしめて、健全なる精神と共に、剛健なる肉體を併せ錬成せしむる事は急務の事實である。斯くして體力向上は健兵健民政策の重點として、又團體的、精神的訓育は一致協力、滅死奉公の念願を培養達成せしむる意圖から觀て、現下最も緊切なる國家的要望である。

曩に日支事變の起るや、工場生産量の增加に伴ひ熟練工（適格者）の不足を補ふ目的から未熟練工或は未經驗者（低格者或は未成年者）を採用して、工場自體に於て技能を主に指導教育せんとする事、及び昭和14年3月31日勅令第131號に依つて發せられた工場事業場技能者養成令に基く養成義務の必要から、特に青少年工の養成教育と云ふ現象が盛んになつた。斯かる目的達成の爲め及び養成工は一般に地方、農村より採用するが爲めに先づ收容すべき住居として宿舍を提供するのが工場厚生施設の重大目的であつた。元來之等の施設の目的は一つの團體的、精神的訓育に便ならしめる爲めであると同時に、青少年工が都會の風に馴染み兎角に放縱なる生活に流れる事を防止し、併せて從業員待遇改善方策の一部に資せんが爲であつたが、實際には自由主義的な傾向のものであつた。然るに現今の大東亞戰爭に於て、その長期化と大規模作戰の展開は、軍需生産部門に於ける生産力增强の絶體的要望から、生産勞働力を强行する必要及び勞務給源確保の意味から企業整備に依る過剩勞働力、動員計畫外需要勞働力の抑制、浮遊勞働力に對する徵用又は勤勞報國隊より成る青少年、婦人、轉廢業者等の未經驗勞務者の參加又は補充を必要とするに至つた。從つて從來の如き精神的、肉體的の完成せる適格者のみを撰擇採用する自由は許されず、肉體的に不充分なる所謂低格者或は未成年者たる青少年工或は從來紡績工場等にのみ觀られた婦人勞務者を機械金屬工業、化學工業の如き重、化學工場に迄採用しなければならぬ現狀である。一方國家的要請に基く生産增强は益々勞役の量的並に質的强化を結果して居る。而して之等の勞務者を主として考へた場合、所謂低格者或は未成年者に對する保護施設として統制ある團體的訓育を施して禮節を敎へ、克己、忍耐協和、犧牲等の美德を錬磨せしめ、猶一般的に觀ても、人的資源を確保、擁護する目的からして、作業制、勞務時間及び休憩時間の適正、休養の方法、榮養の補給及び疾病傷害對策等の厚生施設と安全施設の適否は實に重大となる。特に戰爭が長期化して生産競爭が續けられて行く場合には、餘

りに臨時的な施設では凌ぎ切れなくもなる。故に工場に於ける厚生環境施設は從來行はれた所謂工員優遇を目的とした存在とは全然その趣旨を異にし、能率的、經濟的であると同時に勤勞に依る疲勞の回復、消耗されたる體力の補强、明日への活力源泉の養生を主眼としての心身鍛鍊を目標とした施設であり、工場生産部門に對應した內面的な重要施設の一つであると斷言して憚らぬ。

然し乍ら他方から觀て勞務者の生活には作業場を離れて開放された私生活の一面を考へてやる事も、之亦重要な事實であるが、如何に作業場內の生活を健康的に指導しても、この私生活が非衞生的、無秩序的であるならば却つて其の効果も薄らぐ結果に至る事は當然である。殊に吾國の工業を歷史的に觀ても、所謂親子代々職工と云ふ工場生活に習慣付けられて自認して居る——板に付いた者は極めて少なく、多くは地方、農村からの移入である。而して生活樣式の急激な變調——農村と都會の生活習慣の相違、農業と工業に於ける技能の相異——而して工場生活と自宅生活との間には例へば建物に於ても洋風と和風との差があり——その不調和に依る生活の不均衡を何とか解決しなければならぬ。之は鍊成に依りて或程度の解決は得られるものではあるが、事實上勞務管理方面——內面的規制、建築計畫的方面——環境的規則との兩方面相俟つて進めなければならぬ問題である。而してこの解決の一端として常に勞務者の我國獨特の性格と特有の習性とを明確に把握しなければならぬ。例へば家族制度的の觀念は——過去に於ける自由主義時代には之を封建的と排斥した。即ち個人主義的な社會秩序の基礎を爲してゐた——今日に於ては飽く迄も之を生かし助成する樣に心懸けねばならぬ。我國の住宅に於て室と室との境界は所謂襖、障子の如く紙一重であり、殆ど開放的な規律の中に生育せられて、社會の秩序の鍵は家族制度的な觀念を基とした有機的な組織である。時局の要請に應へて續々建てられる或は整備される大規模の工場に於て、その中に從業する勞務者達の工場生活に對する考への混亂は、この邊の不調和に原因する事も確かに多く種々の形で表はれてゐる樣であるが、之は建築計畫が環境的にその生活を規制すると云ふ立場から、改めて深く考慮して觀る可き問題ではあるまいかと思ふ。

扨て以上の通り今日生產勞働力の維持培養に絕體的必要なる可き工場附屬施設たる厚生施設に就ては、その生產工場に於ける作業の種類と勞務者の性狀或は工場周圍環境の情況等より推して夫々に相異するものであるから、その施設に對して一律に標準型を以て當嵌める事は出來ぬが、今一般的な施設の要目を揭げて參考に供し度いと思ふ。

兎に角以上を總括して最早や今日の時代に於ける工場の厚生施設——勞務者の厚生環境施設——とは、從來の如き單なる工場の福利設施とは全然その趣旨が異なり、急速に充實整備す可き重要なる工場施設である。

元來、工場に於て高熱作業場に於ける熱風、輻射熱の遮斷、新鮮空氣の補給施設、有毒物取扱又は處理作業場或は化學工場又は燻煙、塵埃發生の多量なる工場等に於ける手洗所、浴場又は作業場と隔離した食堂の設備、其の他危害豫防上の各種安全裝置並に衞生規則に規定された各種の工場施設等は充分に考慮すべき重要なる厚生施設と見做す事が出來る。然し之等は工場として行ふべき當然の施設であり、工場建築計畫には必ず包含す可き要項であり今更に云々する迄もない。

以下の事項は勞務者の厚生施設として今後充分に考慮す可き主なる問題である。

（イ）休養休憩施設
　　休憩室
（ロ）體鍊施設
　　體育、運動施設、慰安娛樂施設
（ハ）豫防醫學的施設
　　醫療施設、醫療室、診療所、健康相談室
（ニ）住宅、寄宿舍施設
（ホ）榮養施設
　　食堂、厨房
（ヘ）保護施設
　　授乳室、哺育室、託兒所
（ト）敎育施設
　　靑年學校、圖書室、講堂

2. 厚生施設關係法令

工場法（法律）
工場法施行細則（內務省令）
工場危害豫防及衞生規則（同）

同　　施行標準（內務省令）
診療所取締規則（同）
工場附屬寄宿舍規則（同）
同　　施行細則（警視廳令）
同　　建設指針（警視廳保安部工場課）

以上は厚生施設の主要なる關係法令にして、猶該法令は東京都を標準として列擧したるものである。其の他の都會又は地方に於ては其の內容に多少の相違ある事を承知願ひ度い。

3. 厚生施設の內容

休養休憩施設

僅かの休憩時間にも良く利用出來る休養、休憩設備として、殊に終日太陽光線に惠まれざる場內作業に從事する勞務者に對しては屋外の通路、空地等を計畫的に利用して綠化し、或は屋上又は陽當り良き廊下を利用して晝の休憩時間は勿論、午前後の僅かな休憩時間にも戶外に出して太陽に親しませ、又は音樂に合せて夫々の職場に適した工場體操等を行ふ事の出來る設備が是非必要である。而して徹夜業を必要とする作業にあつては深夜の 2、3 時間と雖も充分なる休息に利用出來る施設が必要である。

體錬施設

今日に於ては慰安娛樂施設と云ふよりも寧ろ工場厚生體錬施設と云ふ可きである。工員に積極的なる心身の鍛錬及び團體的訓錬を行ふため、或は餘暇善用のための健全なる厚生慰樂に供する目的を以て相當の廣い面積の緣地を設定する事は工場の厚生施設として最も效果的である。統制ある團體的訓錬は年若き勞務者に秩序と禮節とを敎へ、克己、忍耐、而して犧牲、協和等の美德を錬磨させる。此種の厚生緣地の位置を工場敷地內又は隣接して設置する事は最も理想的であるが、工場附近或は到達利便なる土地を獲得して施設する事も一方法である。還境上近くに得難い時には一週に一度或に二度、之を利用する時間を其の交通費とを考慮せねばならぬ。又は常に不健康な都市の工場地域に生活する勞務者のため山又は海の家を利用出來れば有效である。

計畫內容に就いて概略次のものがある。
體操、訓練、競技に供する厚生廣場
野球、庭球、籠球等の各種競技場
水泳場、武道場、弓道場、相撲場等の體育施設
家族の兒童遊戲場、釣魚、船遊びの池泉
花壇、農園、散策花路、園藝芝生地
休憩室、集會所、食堂、事務所等

猶之の外に屋外に於ける體育錬成施設として厚生省體力檢定が決定されて居るので、少く共體力檢定實施項目たる走、跳、投、運搬、懸垂の 5 種目に對する練習場として運動場の空地を考慮すれば都會が良いが、空地の無い場合は前述の厚生廣場を利用しても良い。勿論之等の種目に對しての正規の運動場を設けるとなれば相當の面積が必要となるが、最小限度に考へて運動場としての空地は 。　空地面積＝10m²（5坪）/1人
の標準は是非必要である。

工場內に於ける手近かな體錬施設として昭和 6 年以來工場體操が盛んになつた。警視廳に於ても神前體操、產業體操、民謠體操、國民體操、吟咏體操等を工場體操として制定し、各工場勞務者に實施させて居る。元來體操の效果は勞働に依る局部的な疲勞を全面的な疲勞に直す、從つて疲勞度が淺くなり回復も早く、一種の休息が强調されるものと解釋して良い。體操は疲勞輕減の方策として工場に於ては是非實施させねばならず、この認識を與へる事が最も肝要である。體操は一般に中間休憩時前は各職場に於て、特に中食休憩前には屋外の通路、廣場等に於て行はしむる爲め、工場建物周圍の空地は唯に防空上の制限のみならず、斯かる意味から觀て相當廣く採つて置く事が必要である。

豫防醫學的施設

工場に於ては一般厚生施設の一つとして、災害事故に依る負傷者の應急處置、或は疾病の發生したる際の醫療施設を完備させる事は最も理想的であるが、綜合病院又は診療所を經營するのは規模の大なる工場のみに限られる。從つて一般の工場に於ては災害、疾病の處置、豫防撲滅に處するものが、更に一步進んで「保健」「增健」を計る積極的方針を爲す施設を行ふ必要がある。斯かる施設を充實すれば徹底せる指導に依て、例へ低格者に於ける體格も日々の生產活動と相俟つて身體的障碍も起さずに、却つて適格者と同一水準迄に體格向上を計り得る。特に健民健兵政策の立場か

ら觀ても昨今に於ける結核病に對しては可及的に撲滅を計る施設を完備させる事が急務である。從つてその目的のために健康管理を行ふための前提としては、勞務者全部のレントゲン檢査、B.C.Gワクシン注射を行ひて各人の健康狀態を精確に知り、その結果を適當に分類整理して置き、逐時夫々の者の經過を診斷し得る施設は是非必要である。その病狀の結果に依つては作業を變更し、作業時間を短縮し、休憩時間には衞生的な——通風採光、環境宜しき——健康管理室、保養室等にて醫師の觀察下に或期間中每日に休養を採らせる等の施設が必要である。健康管理に於て實際上合理的に實施する事は極めて困難である。多數の勞務者を各人每日監察するに少數の醫師を以てしては到底不可能である。之がために組長或は班長の如き日常勞務者に接近し、その健康狀態其の他を良く熟知せる者を保健衞生係又は指導員に任命し、その組又は班の者の健康を絕えず注意させて、若し多少共異狀を認めた時には直ちに醫局と聯絡して更に精密な診斷を受けさせる事である。然し之と同時に健康管理には勞務者だけでなく其の家族に對しても充分なる注意を拂ふ事が肝要である。之の一例として保健婦を置き、其の家族を訪問し家庭生活一般の指導並に罹病者の發見の場合、醫局と聯絡して適當な處置を採らせて居る某工場がある。保健婦の數は勞務者家族の分布狀態に依りて異るが、一般に小範圍を標準として勞務者 500 人に1人當りの割とし、即ち家族1家5人として 2.500 人の家庭訪問を爲し得る事が統計上に示されて居る。

實際上の問題として工場內に於ける勞務者の健康管理として、結核に對する豫防撲滅の方針は次の通りである。

(1) 豫　防　榮養問題と同時に特殊榮養劑補給。レントゲン檢査、BCGワクシン反應、積極的體育訓練

(2) 早期發見　初感染反應試驗。ツベルクリン反應實施。マントー反應

(3) 療養處置　診療所、療養所

以上の內 (1) (2) は所謂工場附屬診療所として之等の處置を爲す施設を備へて置く事は是非必要である。(3)に於て殊に重患者は他の隔離病院に收容するとして、輕微なる初期患者に對しては前述の如き特に考慮を計らひたる施設を設けて置く事が望ましい。

現今に於ける健兵健民政策を基調としたる立場から觀て、特に結核病に對しては組織的に撲滅を計る施設を完備させる事が急務である。

住宅、寄宿舍施設

勞務者の生活には作業場を離れて私生活の一面を考へて遣らなければならぬ。特に靑年學校附屬寄宿舍、一般勞務者及び徵用工を收容する工場附屬寄宿舍或は共同寄舍の如き所謂獨身者を收容する寄宿舍に於ては、寮長又は舍監に於ても之が管理には實に骨の折れるものである。

住宅に於ても昨今の如く容易に得られぬ時に於ては、豫め工場建築計畫の內に之等の施設は必然的に包含されねばならぬ。寄宿舍又は社宅を勞務者に提供し、殊に交代制に依り深夜業を爲す場合等を考慮して、その住宅の周圍環境を晝間の休息にも適する樣に配慮する事が必要である。之等の建物に就ては陽當り、通風、排水等の建築衞生的考慮を計るは勿論であるが、その位置に於ても工場より餘り遠方でなく、警視廳工場附屬寄宿舍建設指針にも示されて居る如く、徒步30分以內にして環境宜しき位置の撰定が望ましい。若し都會地で近接地に土地が得られぬ時には、せめて工場迄の交通機關の簡單、便利な場所を撰ぶ可きである。

榮養施設

現今希望する食料品の入手には從來に比較して統制化されて居るので仲々希望通りに行かぬ場合が多いので特に集團的給食を行ふ寄宿舍、工場食堂等には榮養の問題に就いて充分なる注意が必要となる。榮養に就ては其の量と質とが問題になる。その必要量に關しては年齡、體力、性別、生活樣式、作業量等に依りて夫々に異る。從つて一律の獻立に依る事は一考を要す可き問題であり、夫々に應じて量と質との差異を考慮す可きである。工場內に綜合厨房を設けて寄宿舍、靑年學校工場に夫々配給する場合、洗米所、野菜、魚肉類の賄場は共同的のものとして一個所に纏め、調理場は夫々に應じて當然區別せねばならぬ。從つて各工場內に各用途に應じた食堂を設くる場合、食器置場、消毒場を含めた配膳室を設け、猪味噌汁

等を供給する場合には特に冬季に於て溫め直す裝置を設けて置く事が必要である。

保護施設

生産增強の要請に基いて當然既婚婦人の勞務參加も相當數に昇る事を見込み、乳幼兒保護に對する施設は當然考慮してやらねばならぬ。乳幼兒保護並に健民育成は長期戰下にあつて實に國家的要望に添ふ樣に乳幼兒の健康增進を計る積極的な施設を爲す可きである。工場法施行規則、第9條ノ2「生後滿1年ニ達セザル生兒ヲ哺育スル女子ハ就業時間中ニ於テ1日2回各30分以內ヲ限リ其ノ生兒ヲ哺育スベキ時間ヲ求ムルコトヲ得、此ノ場合ニ於テ工業主ハ哺育時間中其ノ女子ヲシテ就業セシムルコトヲ得ズ」

授乳室、哺育室、託兒所は同一建物として工場より離れた環境宜しき位置に設け、保健的ものと爲せば良い。而して疊敷及び板張りとなした哺育室と遊戲室を設け、其の他に午睡室、浴室、食堂日光浴室の屋內施設と、遊び場、砂場、芝生等を備へた屋外施設が必要である。兎に角勞務時間中相當の長時間に互り母親が安心して作業能力を發揮出來得る施設である事が必要である。

教育施設

國民學校卒業の青少年勞務者は總て青年學校に入學せしめ、工場勞務者として養成を爲すは當然であるが、此處には一般勞務者を標準としての敎養を施す意味から、圖書室は是非必要である。之と同時に工場娛樂として音樂、演舞等に依りて工場生活に團欒的な精神を育成せしむる事も重要である。從つて武道場、講演會場ともなり、又は式場に或は音樂會場にも代用せらるゝ講堂は是非必要である。

4. 結　　尾

最近、青少年工並に一般工場勞務者の厚生運動又は厚生施設に非常な關心が拂はれて來て居る。厚生施設の必要は既に序言並に各施設の內容に述べた通りではあるが、「厚生」なる言葉の意味を平易に解釋すれば「氣晴らし」である。晝寢を爲すも良し、運動をするも良い。兎に角明日の勞働力を得るための氣晴らしと云ふ大きな意味に觀て良い。而して其の氣晴らしに對する夫々の方法を纒めて云へば、體操（體育）食糧、慰安、讀書が重點となる。之等に從屬して健康管理、乳幼兒保護、住居施設の問題が含まれて來る。勞務者厚生環境の一つとして工場寄宿舍だけを考へても、夫等の施設に對しては仲々重要な問題がある——去る8月24日東京產業報國會主催「工場寄宿舍に於ける寮生活に關する研究懇談會」があり、小生も出席者の一員として各方面の調査報告を聞き、猶その施設の一端を申述べた次第であるが、斯かる問題は追つて機會を觀て述ぶるとし、兎に角本書には勞務者環境に就ての全般的施設を述ぶる積りで、唯紙數の都合上、その概論的に漫然と列擧記述したに過ぎぬ事を大方の了承に待つ次第である。勞務者環境に對する管理、施設等の問題は獨り工場側に於ける問題だけでなく、我々その建築に從事する者としても重大なる今後の研究問題であると附記して筆を擱く。

5. 工場厚生施設計畫に關する參考資料

醫療施設

醫員數＝1人/勞務者300～500人
看護婦＝2～3人/醫師1人
診療所面積＝2～3m²/患者1人（廊下、待合室、治療室を含む）
事務室面積＝20～25m²/勞務者5.000人
レントゲン室面積＝40～45m²
廊下面積＝全床面積×1/5（藥局、配劑室、診療室、外科室、待合室を含む）
所要水量＝0.03～0.035m³/10人

寄宿舍施設

寄宿舍面積＝10～12m²（3～3.6坪）/收容人員1人

榮養施設

食堂
所要面積＝0.9m²/1人（職員用）
＝0.8m²/1人（工員用）
＝0.6～0.8m²/1人（寄宿舍、少年工の場合）

但し之等の面積には通路、食卓、椅子其の他運搬通路の面積をも含む。

厨房
手洗栓數＝1個/勞務者5～10人

所要面積＝0.7m 水栓1個

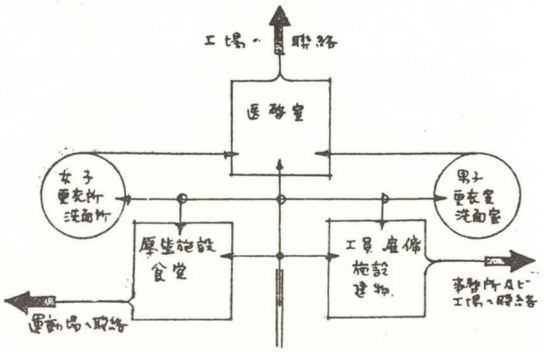
所要水量＝0.003～0.005m³/1人（手洗用）

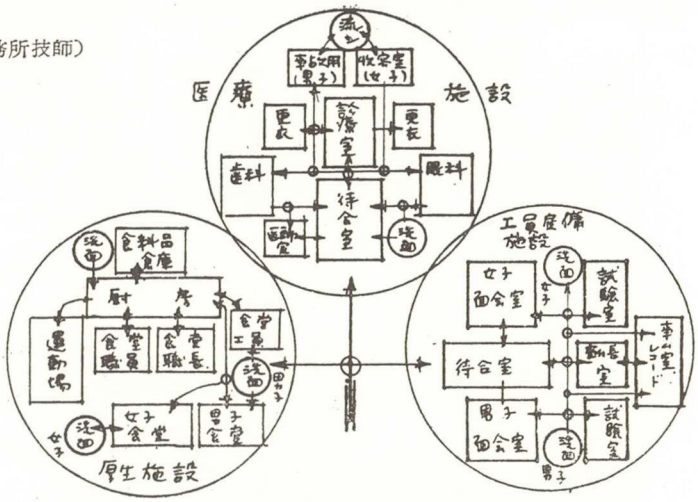
＝0.005～0.007m³/100人（厨房内所要水量）

厨房、食堂面積比＝0.35～0.60（倉庫、配膳室を含む）但し食堂の大さが收容人員200人以上となれば厨房面積は食堂の½に採る事が望ましい。

從來厨房の面積は實に狹小で不衞生であつた。勿論狹小であつても或程度は賄ひ得たものであるが、今日に於ては衞生的な見地から觀て、或は賄人を能率的に動作させる點から考へて、多少の餘裕を見込んで特に廣く設けたい。

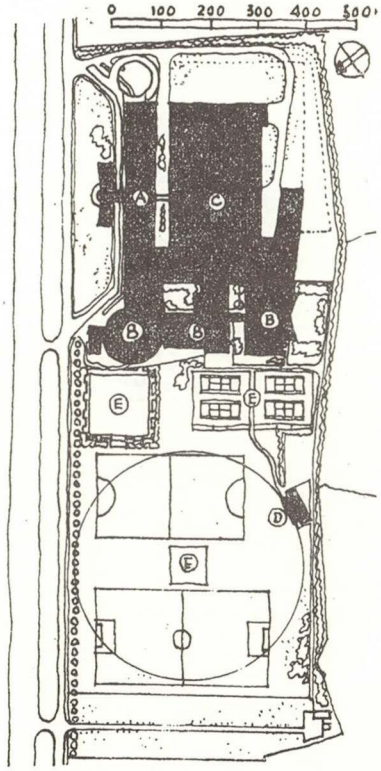
（筆者は　山下壽郎建築事務所技師）



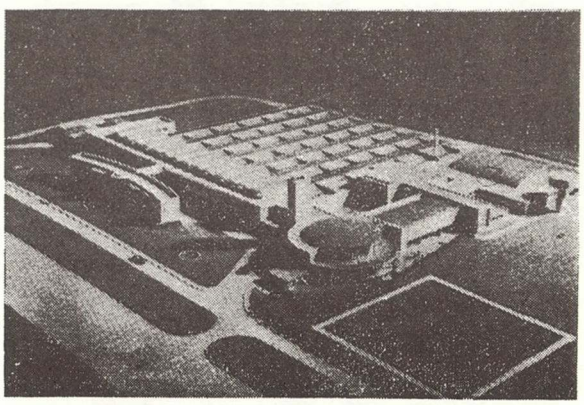


工場厚生施設關聯機能圖

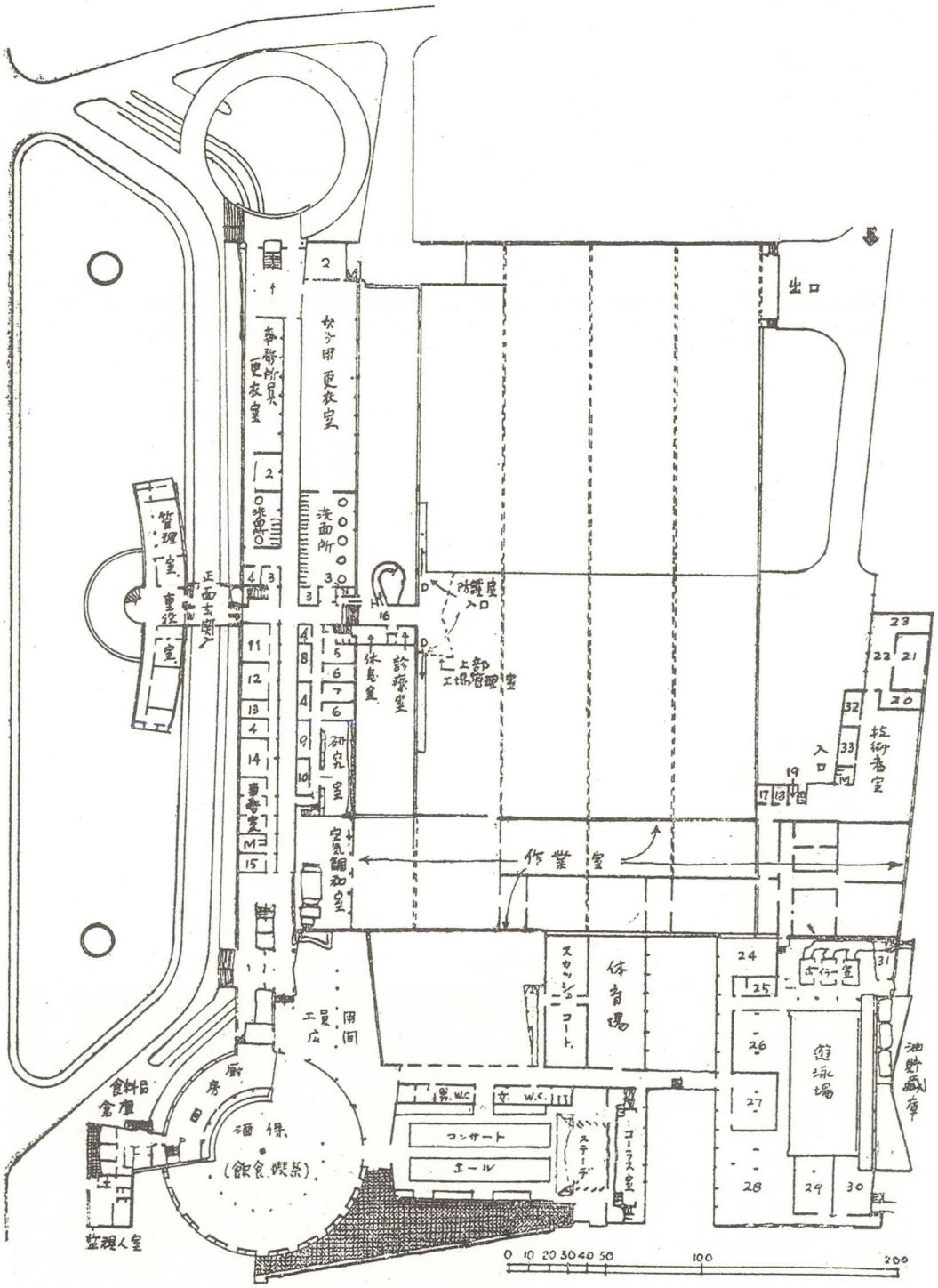
此の工場の特色は從來の工場としての建築以外に防空施設（地下室）と同時に勞務者の厚生施設が完備されて、其等が工場と共に有機的に組織的に統一され計畫されて居る例として此處に揭ぐ。斯くの如く工場と厚生施設とを直接連結された綜合的計畫の適否は論ずる事を省略する。



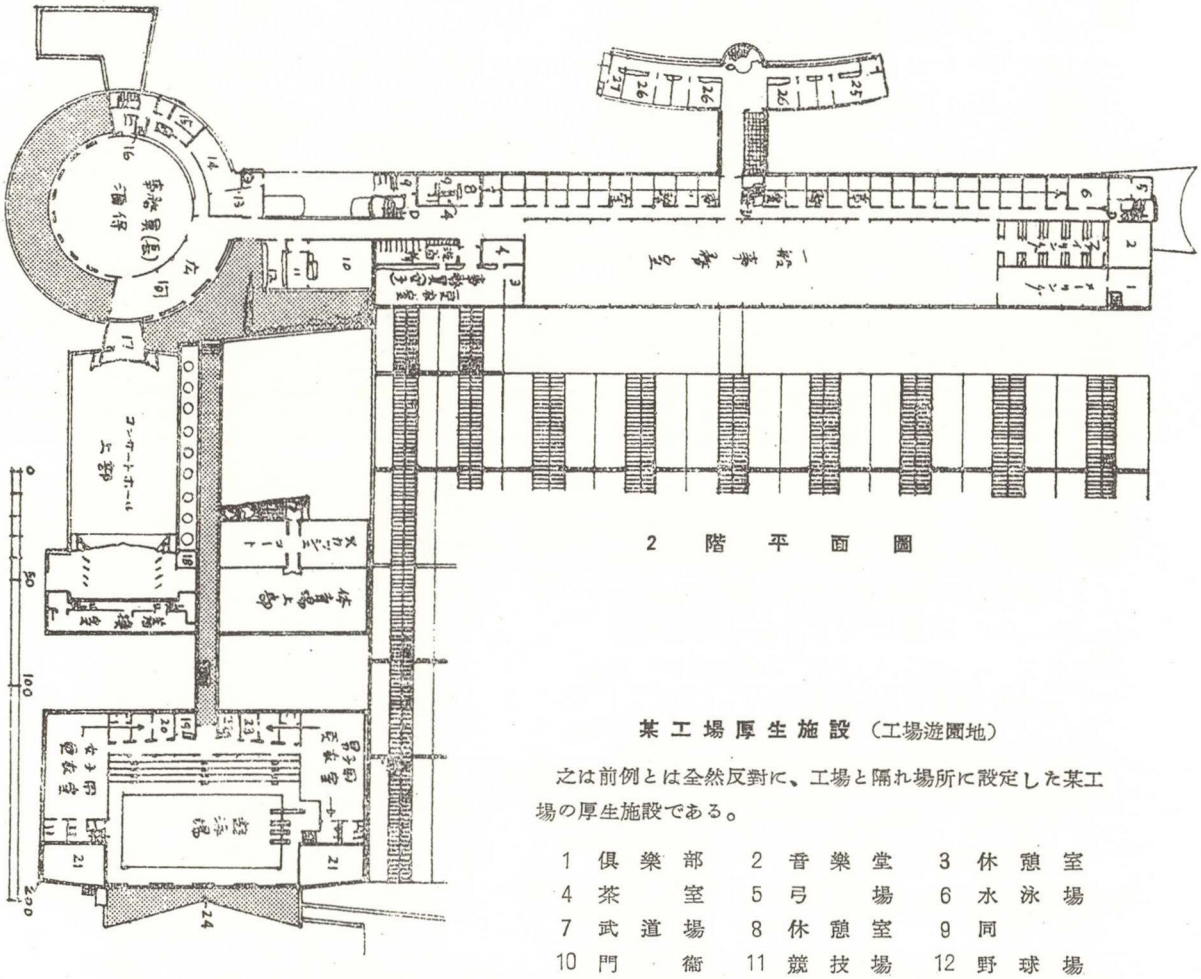
配　置　圖



外觀圖　プツクス化學工場。在英國。


出口
事務所員更衣室
女子用更衣室
男子用更衣室
管理室
重役室
正面玄関
救護室
入口
体息室
診療室
上部工場管理室
研究室
空気調和室
作業室
入口
拡術書室
体育場
スロープ
コート
男 W.C.
女 W.C.
コンサート
ホール
ステージ
コーラス室
遊泳場
油脂倉庫
食料品倉庫
厨房
(飲食喫茶)
保育室
見学者広間
0 10 20 30 40 50 100 200

1　階　平　面　図

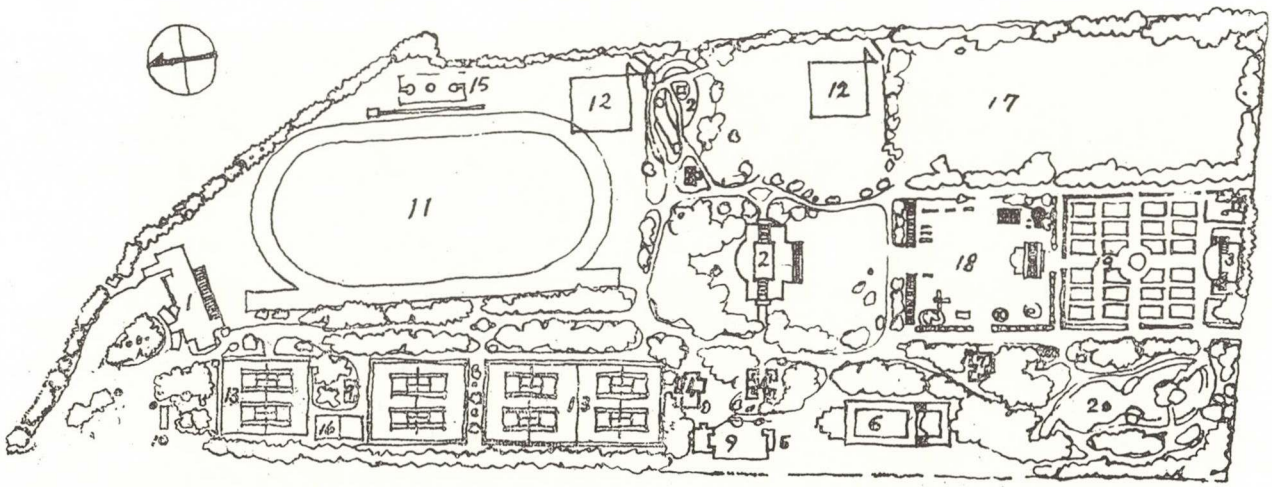


2 階 平 面 圖

某工場厚生施設（工場遊園地）

之は前例とは全然反對に、工場と隔れ場所に設定した某工場の厚生施設である。

1 倶樂部	2 音樂堂	3 休憩室
4 茶室	5 弓場	6 水泳場
7 武道場	8 休憩室	9 同
10 門衞	11 競技場	12 野球場
13 庭球場	14 相撲場	15 休憩室
16 籠球場	17 厚生廣場	18 兒童運動場
19 農園	20 林泉地	



夜・晝・闇

小田島兵吉

夜

夜中にふと眼をさました。蟲の鳴聲が聞える。毎日々々仕事に追はれて、この何年間といふものしみじみ蟲の聲などに耳を傾けるゆとりも無かつたのだが、こうしてジツと聞いて居ると、實にやかましい。枕のすぐ傍で鳴いてゐる樣でもある。何かこう機械が運轉してゐる樣に休みなしにひゞく。よく聽いて見ると實に多くの種類がゐる。あゝあれが蟋蟀だ、あれがすゐつちよだな、鈴蟲も居ると判るのだが、ボンヤリしてゐると、織機工場の內部にでも居る樣な錯覺をおこす。

妙な云ひ方ではあるが、このやかましい蟲の音にも拘らず夜は非常に靜かである。日々苛烈深刻になつて行く戰爭が何處にあるかと思ふ位、靜かである。伊太利が無條件降伏をしたといふ晝の昂奮も、この靜けさに溶けこんでしまつた樣である。

暑苦しいので宵にあけて置いた窓から、冷たい風が入つて來て、蚊帳がひどく動いてゐる。

子供達は突貫しさうな格好や、今にも驅け出しさうな格好して、蒲團からころげ落ち、眠りこけてゐる。

寢冷えでもしたら困ると思つて窓を閉めやうとして外を見た。八日か九日位の月ではあるけれども、あたりは明るく木の葉も白く光つて見えた。

少し離れた所に建築中の住宅が見える。これは隨分長いことかゝつてゐる。もう半年以上になつて、今瓦を葺き、やつと壁土を塗つたばかりで有る。未だ床板も何も張つて無く、無論建具も入つてゐない。その椽側と覺しき部分が、月の光の蔭になつて、大きい眞黑な口をあけて無氣味に靜まりかへつてゐる。入母屋の妻の部分が、三角の一つ目の樣におびやかす。

留守番の居ない、こはれた空家の樣な妖氣は漂つてゐないけれども、それでも見えない暗い隈の方には、黑い蛇でも、もつれ合つてゐるのではないか、押入の中あたりに蝦蟇でも、うづくまつてゐるのではないかと想像されて良い氣持ではない。椽の框に下つた一すじの繩のきれはしが、ダラリと垂れた蛇の死骸にも見え、塗つた壁土も乾き切らず、斑になつて、第三期症狀の皮膚を見る樣で、何だかすさまじい。

いつも建築場は晝ばかり見つけてゐるので、夜の無人の工事場を見るのは勝手が違ふ樣である。

どこで都合したか、今どきにしては割に品質のいゝ瓦が葺いてあり、それが銀色に光つて、こんな夜中の景色にそぐはず、不自然に見える。

こういふ時節に敢えて建築しやうと云ふのだから、材料なども廻りにくいと思はれるのだが、それが少しづゝでも入つて來て、遲々とはしてゐるが、兎も角も形になつて行く所が妙である。

勿論餘分の材料などは無く、加工して持つて來ては使ひ、使つては又材料あさりに出かけるといふわけで、工事場には鉋屑なども無く、木材の切れつぱしが落ちてゐることも無く、周圍は夜目にも割合に片づいてゐるのが見える。今迄見なれてゐる亂雜な工事場の方が却つてなつかしく思はれる位だ。

こういふ未完成の建物を見てゐて、やがてそれが竣工して庭も出來、生垣も揃ひ、幾人かの人間が出入するその光景を想像することは出來るけれども、それが實際出來た時の形と、想像してゐる時の形との間に、どの樣な差があるか知らん。と考へて見た。

大抵の場合、住宅に限らず、ほかの種類の建物でもさうであるが、工事中の方が面白い樣だ。コンクリートの建物など、施工中は壓倒される樣な氣がするのが、出來上りが、クリーム色か白色か

の、華奢なタイルでも張つて、すつかり感じが違つてくるのもあるし、折角大きい建物が建具の形のために小さく見える様な例もよく有る。

見る人々の心の中で、想像を逞しくして、自分勝手の形を造り上げてゐる時の方が、實際出來上りのものを見た時の感じよりも樂しいに違ひない。

逆にこれは又完成した建物が壞れた時も同樣に云へるだらう。完全な細部が無い爲に、破片だけを見て、昔はどんなに立派だつたらうとか、その無くなり散逸してゐる部分が良くなかつたかも知れないのに、それを想像して美しい形にして畫いてゐることも有り得る。ところが現實に出來てゐるものには空想の入りこむ隙がない。

猛烈な非人道的な空爆をうけたミラノとかハンブルグとかの建物の中にも、たくさんそう云ふのが出來たに違ひない。ミラノもハンブルグも、どういふ所だか知らないけれども、新聞で見ると、古い由緒のある寺院とか劇場とかの建物が大分破壞され、廢墟になつてゐるらしい。

惜しいとも思ふけれども、國家存亡の秋に、そんな建物とか記念物とかに、あれこれ云つても居られまい。それなのにローマ非武裝都市などゝ宣言する樣な根性だから、盟邦を裏切つて無條件降伏をしなければならない樣な破目になるのだ。

目の前にいろいろゴチヤゴチヤになつた石造や煉瓦造の建物の殘骸が浮ぶ樣な氣がして、目を見はると、窓下には枯れかけた葉と一所に、取り殘された南瓜が一つ、月に光つてゐるだけだつた。

晝

『戰爭には是が非でも勝たなくてはなりません、石にかぢりついても勝たなくてはなりませんよ。その爲にその爲に、こそ我々一億のものが一生懸命になつて頑張つてゐるんです。

おかげ樣で工場は屋根を葺くところまで行きました。器械の据付けを終るころには建物もすつかり出來るでせう。工員たちは××月には、たとへ一キロでもいゝから製品を出すと云つて張切つてゐます。そして一日でも早く飛行機をつくり出して貰ふんだと云つてゐるんです。』

ある六月の晝、こう××重工業の建築課長のH氏は現場視察に行つた私に話した。

まことに戰局は一日々々と重大になりつゝ有る。戰線では一日でも早く、一機でも多く、一艦でも多く、飛行機を、彈丸を、又軍艦を要求してゐる。苛烈深刻といふ言葉がよく使はれてゐるが、事態は全く生やさしいことでは無い。

『とにかく何でもいゝから、早く役に立つ建物を造つて貰ふことです。一日でも早く建物を造るといふこと、そのこと以外に現在の我々としては御奉公の道はないと思ひます。いゝとか惡いとか、強いとか弱いとか云つてゐる時ではありません。

亂暴な云ひ方だけれども、市街地建築物法がどうの、標準規格がどうのと云つてゐる時期では有りませんね。勝つまで當分の間、壞れさへしなければいゝのです。

今は非常時も非常時、大非常時だから、あたり前の設計や、あたり前の施工方法では、この難局を乘切ることは六ケしいと云はねばなりません。私は自分の關係してゐる工場は丈夫で、立派で、出來るだけ鐵骨でも使つて堂々としたものを造りたいのは山々ですけれども、この鐵柱一本で彈丸が何發か出來、戰車の何分の一かゞ出來るのだと思ふと、たとへ鐵材の配給があつても、それを使用する氣にはなれないのです。

とにかく理屈もへつたくれもありません。勝たなくてはならんのです。』

建築課のある所は、ガランとした倉庫の眞中である。事務所はまだ着手してないので、出來上るまで、この倉庫として建築した、窓の高い、入口の大きい、天井もなく、太鼓におとした陸梁や合掌が見えるガランドウのコンクリート叩きの上で事務をとつてゐるのである。

風が入る樣な開口もないのだが、そんなに暑いこともない。尤も冬だつたら我慢し切れないだらうが。

高い窓越しに、殆ど出來上つた××工場の棟が見える。H氏はつゞける。

『それにしても、この數年間に建物の規模の大きくなつたことは如何です。昔は紡績工場など、一萬坪も建坪を持つてゐることを、驚いて眺めてゐたものですが、このごろは一萬坪などザラにあ

りますね。一棟數萬坪のものさへ有ります。出來た建物を見ればさう大して驚くにあたりませんが其の建つ前、繩張りをして見ると、いかに大きいかと云ふことが判ります。建物の四隅にあたる所に目印しの旗を立て、その一方で對角線の方の旗を見ると、遙か遠方にひるがへつてゐるのです。霞んで見えぬこともあると云つても、大袈裟ではありませんよ。從つて敷地は何十萬坪もあり、百萬坪を超えるものさへ有ります。敷地の端から端まで數キロも有り、巡視に出た現場主任が、朝出ると、夕方しか歸れんといふ様な所もあり、私の知つてゐるのでも、敷地全體廻はるのに自動車で一時間餘りかゝつたことが有ります。まるで嘘みたいですね。

こふ云ふ現場のどれもこれもが、米英撃滅のため、土工も大工も、左官も石工も、世話役も親方も、現場監督と心を合せて、生産增强のための建設に努力してゐるのです。不足勝の資材を如何にして確保するか、人手不足の困難を如何にして切りぬけるか、而も一刻も忽せに出來ぬ建設の任務を如何にして遂行するか、請負者側の現場主任も、又我々も、日夜頭をなやましてゐるのです。惱ましてゐるだけでは何もなりません。直に解決しなければならんのです。徒に荏苒としてゐるのを許しません。

資材が揃はぬため、大切な時間を手をつかねて空費してゐるあの切ない氣持は、たゞ設計だけに專念するあなた達には、ほんとうには、お判りになれんかも知れません。木材はあらかた揃つて切込みも出來てゐるが、セメントが遲れた爲に基礎にもかゝれぬなどゝ云ふ事態もないでもなかつた。人夫の中にも時局を認識しないのがあつて、出たり入つたりしてゐて思ふ様に工事が進捗しない、そんな時の焦燥といふもの、實に泣くにも泣けぬ氣持です。

建物の設計については資材資約のため、軍部の方から戰時規格といふか、かなり思切つた方法を呈示されてゐるので、大體それに依つてやつて行くつもりですが、前に申しました様に、市街地建築物法といふのが、やはり顏を出しましてね。それに手續が依然として複雜なのは、も一つと云ふ氣がしますよ。』

H氏はパイプにヤニがつまつた様な苦い顏をした。碧い空は遠くのリベットを打つ音をつたへて來る。杭を打つ音も交つてゐる。その音の一區切一區切がつみ重なつて、米英を倒す兵器をつくるその肝心の建物を造り上げることを考へると、その音すら仇おろそかに聞きながすことが出來ない氣がした。

ところがその市街地建築物法の本家の內務省からも、やはり官廳建造物の戰時規格といふやつが出たやうですよ、大體は軍部から出てゐるのと、內容は似てゐると思ひますけれども、と私は偶然手元にあつた刷物をH氏に差出した。

これは建築關係、土木關係、電氣關係等を含んだ四項に分れてゐるが、資材、殊に銅、鐵材、セメント、木材等は出來得る限り節約しろと云ふに盡る。そのうち特に荷重の低減といふことがあつて、この緩和規定は全項目中、最も我々に關係の深いものである。（參考參照）

勿論注文をつければいくらでもあるが、こういふものが出たといふだけで、我々はどの位やりよくなつたかわからない。

之れは勿論民間の建物に對しても適用されて、少しも差支ない。差支ないどころかこれでやらなければいけないと思ふのである。

一通り眼を通したH氏も、『これは大東亞戰爭勃發と同時に出たら、もつとよかつたでせうね。私の所では風あたりがきつい爲、この低減に依れないうらみはありますけれども、その他は大いによろしいと思ひます。谷樋は仕方がありませんが軒樋なんかも止めてしまはうと思ひましたが、風あたりがきついので雨が横から降る様な狀態で、軒樋がなかつたら工場の製品に影響があるといふ話が出て、それは思止りましたが、もうブリキやセメントばかり當てにする時世ではありませんね。』

倉庫住ひの建築課を出ると、强烈な太陽の光が帽子をかぶらない頭を燃やしてしまひさうだつた。あくまでも碧い空に浮ぶ白い雲は、戰爭がかく迄身近かにせまつてゐるにも拘らず、無心に、何事もない様に流れて行つた。

〔參考〕

(二)設計安全率低減＝關スル事項

(甲)建築關係

(イ)積載荷重

市街地建築物法施行規則第百五條第二項積載荷重ノ小梁、大梁、柱又ハ基礎ニ對スル低減割合ヲ夫々小ナル構架材（根太、母屋大引等）ニ對シテハ十分ノ二、大ナル構架材（小梁及大梁等）ニ對シテハ十分ノ四、柱及基礎ニ對シテハ十分ノ四乃至十分ノ五トスルコト

猶本件ハ同規則第百五條第一項規定ノ各種床積載荷重ノ最小限ヲ合理的ニ低減シ、之ニ代フル事ヲ得ルモノトスルコト

(ロ)雪荷重ノ算出規準

從來本州南海岸、四國、九州地方ヲ通ジテ積雪量三〇糎ヲ平均値トセルモ、東京地方二〇糎、其ノ他南海地方一〇糎トシ、其ノ他ノ地方ハ實情ニ依ルモノトスルコト

(ハ)風壓力ノ想定

從來高十五米以下ノ一般建造物ニ對シテハ速度壓ヲ毎平方米一〇〇瓩トナシ、猶市街地ニアリテハ隣接建造物中ノ最低高以下ニ相當スル部分ニ對シテハ更ニ是レガ三〇%減ト想定シ居リシモ之ヲ平坦ナル市街地ニアリテハ一律ニ五〇%減トナシ、其ノ他ハ實情ニ依ルモノトスルコト

(ニ)地震力計算ニ際シテノ積載荷重ノ低減割合

從來施行規則第百五條第二項ニ十分ノ五以內ト規定セルモノヲ十分ノ七以內トスルコト

（以下略）

閑

戰場へ出れば、あらゆる日本人は例外なしに、生死を超えて、忠勇無比なる働きをする。

それが日本といふ國の有難い所以であり、世界に誇るに足る點であると思ふのであるが、その同じ日本人でゐて、戰線から遠くにあり、緊張が無いと、いろいろ非難をうける樣な行爲をするものがある、といふのは奇妙である。

人間であるからいろいろな性質のものもあらうけれども、平時だつて勿論だが、こういふ大切な時期に國家が禁じてゐる行爲を、たとへ止むを得ぬ理由があるとしても、それを敢てするといふことは、時局をわきまへぬといふ譏は無論、人間として考へても、まことに情ない話だ。これは國民全體から考へれば、僅かで殆どとるに足らない數であらうけれども、一億こぞつて聖戰完遂に邁進してゐる時に、その僅かな數でも統制を亂るといふのは、實に面白くない。

例を建築にとると、今年の4月の中旬だつたかと思ふが、6月1日から十五坪以上の住宅の建築には許可が要ることになつた旨新聞に載つた。許可とは云ふがこれは殆ど禁止と云つてもいゝのである。5月31日迄に完成しないものは中止を命ずる、但しそれ迄に半分以上（？）出來上つてゐるものは、場合によつては建築の續行を許す、と云ふのである。

これが發表されると足元から鳥が立つ樣に、あつちでもこつちでもバタバタ建築し始めた。

あはてゝ堀方をする。基礎を置く。柱を建てる。折角準備したものだから、出來るだけやつて見やうと云ふのが主であらうが、見てゐて淺ましい樣でもあり、氣の毒な樣でもあつた。

みな百平方米（三十坪）の住宅である。

この中には家が手狹で困りに困つて、のつぴきならずに建てるのもあるだらうし、あはよくば、一儲けしてやらうと思つて建てゝゐるのも有るだらう。まアそれはそれでもいゝ。

ところで5月の末から6月の初めにかけて續いた雨天のためと、やり繰り算段して寄せ集める材料の不足のために、6月がすぎて基礎がやつと出來たばかり、柱も建つて無いのさへあつた。

そんなのは中止を食ふのではないかと思つてゐたが、どういふ手續きをしたのか、その後チリポリと、あるかなきかの材料を運んで來ては、細々と建築をつゞけてゐる。しかし9月末の今もつて出來てゐないのがある。

しかし問題は其處にあるのではない。

屆け書と違つてゐる點にある。三十坪だと稱してそれ以上大きな家を建てゝゐる點にある。階高を高くして、秘かに天井裏に室を設けて置き、檢査の時は平屋をよそほひ、竣工檢査をうけてしまつてから、押入などとり拂ひ、階段を通じて使用すると云つた風のものもあるし、三十坪の建物を別

々に少し離して建て、あとから廊下でつなぐと云つた割に幼稚なものもあるが、これ等は出願當時はすべて合法的であるので、うまく當局の目を逃れたものである。

大體こういふ制限令を出さねばならないといふそもそもの由來を考へて見たであらうか。**眞に國を堵して**戰つてゐるといふ言葉の意味を吟味したであらうか。

ほんとうに時局に認識を持ち、我々の面してゐる事態を視得るほどの者は、たとへ制限以內の小さな建築をするといふことさへ遠慮すべきでないだらうか、尤もそういふ認識がないからこそやつてゐるのだらうが。

人間には妙な癖があつて、出來ないことをやつて見やう、してはいけないといふことをこつそりやつて愉快を感ずることがある。中學生が煙草を吸ふ樣なものだ。

又そういふ本能があるからして、人間も進步發達するのだらうが、法網をくぐつて、それがうまく發見されなかつた時、俺はうまくやつたぞと、妙な優越感といふか、不安な滿足を感じて、得意になる人がある。さうかと思ふとさういふことをそそのかす者さへある。

無智蒙昧ならともかく、相當教育をうけてゐて、家でも建てやうとする人が法令で縛らないと、云ふことを聞かぬといふのも、ほめた話ではないし、第一大東亞の指導國民などゝ威張れた義理ではない。隙ばかり狙ふ人に對しては隙をふさがねばなるまい。例へば建築坪數の制限は平面積でなしに立體積（これだつて中々容易ではあるまいが）で取締るとか何とか方法があるだらう。

がしかし情ない話だ。　（昭18.9.10）

この稿成つて旬日、22日政府から國內態勢强化に關する方策が發表されて、戰場も銃後もなく、一億凡て戰闘配置につく事になつた。

もはやもぐりみたいな事をするものは一人も無くなるだらう。22日の夜、涙を流して東條首相の演說を聞いた程のものは、誰しも肇國以來三千年の一大國難に敢然おもむく決心を固めないものは無かつたであらう。

情ない話だなどゝいふ言葉は、そのまゝそつくり字引の中に封じ込んでしまはうではないか。

（昭18.9.23）

（筆者は　大林組勤務）

戰時の家具の問題

劍持　勇

1. 住宅用家具

日夜決戰の連續である。喰ふか喰はれるかは、今や正に始まつたと云ふ實感が深い。敵も必死だ。その銃後も馬鹿に出來ないものを持つてゐることが窺はれる。我々は一層國民生活を堅實にし、能率化し、彼等が屈服するまで頑張り通すだけの力を培ひ蓄へなければならぬ。

斯うなつて來ると、ひと頃唱へられた合理化運動、科學化運動、簡素化運動の中には大部訂正を施さなければ生ぬるく感ずるものが少なくない。

生活用具に關する種々の提案などが先づさうである。特に建築に關係の深い家具について云へばひと頃「國民何々」と云つてなんにでも國民の字を冠せずにはおかなかつた一時機があつたが、その折に、家具についても「國民家具」と云ふものが問題になつた。しかしその頃の「國民家具」の內容たるや頗る生ぬるくて、今尙此處に持ち續けてゐることは到底出來ない。その頃の概念で行くと洋服のための箪笥とか、茶箪笥とか、應接用の椅子セツトであるとかと云ふ樣な類まで日用必需品家具の中に數へられて居た。

然し、今や品種を始め、夫々の內容が嚴しく檢討されなければならない時期に到つた。即ち、今度こそ、最終的にギリギリの最少限の線まで切り下げなければならないのだ。その主なる理由は、第一に資材、次に勞力である。18年度に民需に割當てられた木材量は極めて少量で到底從來の如き多くの品種の生產を許さないのである。つまり限られた資材の下にあつては、品種を半減しても、一人でも多くの需要に應へるのが道義的であると考へられるのである。

斯うした意味で最後のふるひにかけられて殘つたものが食卓、箪笥、鏡臺、食器戶棚、立流、勉强机等の數種の品種である。これらは優先的に規格型が決められ計畫的に生產が行はれることとならう、そしてこれら以外の品種は恐らく市場からは求めがたくなることとならう。しかし最低限の住生活はこれらの數品種の家具によつて充分營みうるとされてゐる。又營みうる樣に努力しなければならぬと思ふ。尤も今後の住宅は何れにせよ狹少住宅であらうから、家具を餘計置かうにも置く餘地がないわけであるから、家具が足りなくて苦勞すると云ふことは餘り考へられない。

今、規格型の設定と、計畫生產のひと先づ進められようとしてゐるのは以上の品種のうち箪笥、鏡臺、食卓の三種で、これは新世帶向家具として特殊の考慮を拂はれてゐるものである。

此の三種の家具は限りある資材を公平に廣く有效に生かす關係から、從來の形式內容から離れて可成思ひ切つた案によつて行はれることになる。

例へば箪笥は、從來は三つ重ねで鴨居下端近くまであつたものが二つ重ねになるかも知れない。そもそも三つ重ねと云ふ箪笥の形式は極めて近代に出來上つたもので、僅か以前までは二重ねが普通であつて、それを思へば三重ねが二つ重ねになつたとしてもそれ程不自由になるとは思へないのである。その上資材的に三分の一近くの材料が浮ぶから全體としては可成りな節約となるわけである。

鏡臺などは商品的種類の多過ぎる適例であつたが規格型として一種乃至は二種に限られよう。鏡臺としての機能は鏡面にあり、必要にして充分なる鏡面の大きさが凡てを決定する。處でその鏡が矢張り一定の規格によつて生產されることになるので、鏡臺の大きさも之に或程度準ずることになる。ともかく以前の樣な姿見と云ふ如き大きなものは考へるべきでなく又不可能なことで可成り少さくなる筈である。しかし之も箪笥同樣昔の鏡臺

のことを思へば小さくなるから不自由とは云へない。昔の物と云つても明治大正の頃に一般に用ひられた型のことであつて、鏡の大きさは高さ二尺たらずのつゝしまやかなものであつた。

食卓もこれまで大きさの種類が多く、需要者が家族數に照應して求め度くても規準が示されてゐなかつたが、規格型ではこのことが相當研究される筈で、何人家族までは何の大きさで充分と云ふことが定められる。

さて以上の規格化の仕事を行なつてゐるところは、云ふまでもなく商工省の物價局であるが、詳細なる問題については工藝指導所や中央物價統制協力會議などが協力的に當つてゐる。規格型の生産に關しては日本家具統制協會の擔當である。

ともかく、近頃家具の拂低は相當なものらしく喰物と異つて餘り人の言葉に乘らないから目立たぬが新世帶を控へてゐる人々にとつては想像以上の苦勞らしい。この様な有様が一年二年と續くとすれば國民の生活力即ち國家の力に及ぼす影響も相當なものになると考へられる。

2. 事務向家具

住宅用家具と並行して、勤勞生活面に於ける家具であるところの事務用家具にも規格化の問題がある。

そもそも事務用家具に規格化の問題が出たのは何も最近に始まつたことでなく、既に戰前において生産合理化が計られてゐた。凡そ十年前の昭和9年11月15日、商工省内に設けられた臨時産業合理局は事務用椅子及卓子類について單純化規格を決定し、詳細な寸法表及び仕様書付きの圖版まで公布した。しかるにその効果や如何にと云へば、之が殆ど業者にも需要者の側にも利用されず、依然として官廳でも會社でも各自思ひ思ひの設計により、標準型なぞ何處吹く風かとばかり問題にせず、好き勝手な意匠による事務用家具を使用して來たものである。しかし今やその様な好き勝手は不可能のことゝなり、單純化された規格による生産に依らざれば、大量の需給は困難なことになつた。

そこで商工省は10年振りで再び事務用家具の單純規格化を行ふことになり、今度は前記住宅用家具と同じく物價局の手によつて取扱はれる。

事務用家具の、他の家具と異るところは、机でも椅子でも階級別にその種類を考へなければならぬことゝ、集合して使用するからその際凹凸高低なき様、寸法を統一的に考へなければならない點等である。階級別を際限なく考へると、同じ机でも種類が增へて來るし、と云つて餘り階級を簡單化すると上下の區別が無くなり、人事統制に支障を來たすし、中々問題である。

從來兩袖型が一番上で、次に片袖型、序で袖のない平型となるが普通であるが、今回の規格型では兩袖型は6尺近い板を多數用板材に必要とするので之を廢止する傾向にある。その代り脇机に種類を增し、之を片袖机と相組んで兩袖型とすると云ふ計畫である。又椅子は布地が少ない折柄椅子全體を張りつゝむ式の總張り椅子も問題で、結局背凭のみ布張りにして左右の肘のところは木部のまゝの程度の型が最上級のものとならう。又座の廻轉金具も、今後金屬は例へアルミでも使用が難しくなるので、非金屬材に依らなくてはならなくなる。

木材も同一種の良質材ばかりで作ると云ふことなど勿論不可能で板目柾目がまざることはもとより、異種材との混用すら行はれることにならう、又抽斗も數が多いと便利ではあるがそれだけ材料を多く喰ふので必要なだけに制限もされようし、引手はもちろん金物でなく木製になる。しかし材料ではいくら落ちても、機能的內容と、構造施工については、從來のものに比して優るとも決して劣らぬものになるのでなくては困まる。

斯くして事務用家具の規格型が決定した曉は、企業整備により合同强化された生産機關によつて計畫的な大量生産が經營されることにならう。さうなれば、建物は手に這入つたが家具が無いために仕事が手につかない等と云ふ新設の官衙や會社につきもの悲劇も無くなるわけである。

規格型が決まるについて需要者側、即ち、官廳や會社の人々に註文がある。それは、今度の規格事務用家具によつて室內の空氣は自然清新なものになるものと思ふが、此の機會に整美された事務室を作る様に心懸けてほしいと云ふことである。美化された職場は能率を增進せしめる。亂雜なるが爲めに能率によいと云ふ驗は無いのである。

3. 工 場 用 家 具

職場の家具と云へば、今まで殆ど觀られないものに工場用家具がある。住宅用や事務用家具については以上の如く合理化、規格化が實踐されようとしてゐるのに生產增强の第一線において用ひられる工場用家具ばかりは依然として舊態のまゝである。

一口に工場用の家具と云つても工場の種類は頗る巾が廣く、中には鋼鐵の溶解作業の如く、作業場自身が機械的であり、或は大型飛行機製作に用ひる治具の如く、餘りにも大きく、逞しきものは一寸家具の概念を以つてしては扱へない。從つて此處で云ふ工場用家具とは、激しい動的作業でなく、比較的靜的な作業に用ひられるものを主として考へてゐる。例へば一般の機械製作作業、特に精密性を帶びて來るもの程、作業に必要とする設備は、もう家具として考へなければならない性質が出て來る。體を始終移動させる樣な仕事の荒いうちは工作臺等も寸法さへ適正であれば、あとは頑丈であればよいと云ふわけであるが、精密機械や、光學機械、計測機械等の製品を取扱ふ樣な場合は落着いた作業環境が要求されて來る。つまり環境條件の中に心理的なものを一つ加へなければならなくなつて來る。能率々々と云ふ時に家具のこと等に構つてゐられるものかと云はれそうであるが、實はさうではなくて能率を上げなければならぬならば、作業家具こそ間に合はせであつてはならぬ。大概の工場では、工場用家具として本格的に設備したものは極めて稀で、工場技師による素人的設計によるものであつたり、市場から住宅用家具をよせ集めて來て間に合はせてゐたり、家具屋が好ひ加減の工夫で御用をみたしてゐたり等色々で、感心する樣な例には我國では一度も御目にかからない。

今後益々我國が工業國として結論されるならば工場環境を造型的な面から具體的に、技術的に解明し建設する專門が一つ成立たなくてはならないと思ふ。工場建築とか工場設備とか云ふ方面では既に專門がある。しかし工場環境整備だけは今日尙繼子扱ひを受けてゐるのである。

特に、此の頃では資材、勞力の拂底により益々調達が不如意になつて來てゐるから、何んなものでもあればよいと云ふ傾向は益々强い。しかし生產擴充分面では他と違ひ木材等も比較的樂に割當てられる筈であるから、人の手さへ得られゝばよいものが出來る筈である。人の手も、此の頃では會社專屬に木工場を附屬させてゐる會社が少なくないから、こう云ふ所では、思ふ通りに理想のものが自給自足出來るわけである。

この頃、新設される工場の中には廢止工場の買收によるものが多い。紡績工場が機械工場に利用されると云ふ工合である。さうなると、建物はそつくり利用出來るとして（それも相當の修理を要するが）工場內の諸施設は全く一新しなければ使へないから、何れにしても工場用家具合理化の機會はいくらでもあることになる。我々の責任が此處にもあると云ふことを痛感する次第である。

今一つ我々の新しい課題とし生產に携はる若い人々の寮の施設がある。寮はまだ緒についたばかりで、建築施設的には一應目鼻がついてゐるが、生活樣態ならびにそれを受け入れる住む環境としては幾多の問題が解決されないまゝにある。その生活樣態たるや頗るあいまいなもので指導性に缺けたものが見られる。これについても我々が技術的に協力せねばならないことを深く感ずる。

（18.8.1）（筆者は　商工省工藝指導所技師）

時評

草一路

空爆と文化財に就て

ここでいふ筆者の文化財といふのは、主として古美術工藝品、古文書、古圖書の類だ。一度なくなつて了ふと、もう二度と得られない貴重品である。日本の文化を如實に物語る生きた證據品で、吾々の祖先が今日まで無事に保存してくれたのに對して、吾々は又、是れを永久子孫に傳へる責任がある。人命には何物も代へられぬが、時としては人命以上大事に考へてよい種類のものだ。

吾が國は世界に類例のない國體の有難さに、かうした文化財が割合に豊富に保存されて居る。之れは吾々國民として、何よりも感謝しなければならぬ現前の事實だ。尤も國史上、領土を外敵に蹂躙されたといふやうな事は未だ且つてないが、國內的な爭亂は度々あり、その都度表記の類の所謂文化財と稱す可きもので、煙滅に歸したものも相當に有る。若しそれ等のものが、今日まで無事に保存されて居たとしたら、吾が文化の傳統を語る上に、更らに豊富な資料が提供されて、今日吾々が知る以上に、多數未知の事實が發見せられた事であつたらうと想像される。併し、これは止を得ぬ事だ。今になつて何を言つても仕方がない。幸ひに保存されて居る現存のものだけで滿足しなければならぬ。と同時に、之れを將來に、無事傳へるだけの覺悟が必要だ。

戰ひはいよいよ熾烈を極めて、吾が本土と雖も、何時敵の空爆をうけるやら分らぬと言はれて居る。1機や2機の紛れ込むのは有り得る場合と想像されても、まさか100機、150機といふやうな多數の編隊で、空爆を受けるが如きことは絶體に無からうといふのが、今日まで吾々の抱いて居つた空たのみであつたが、最早そんなことで安心しては居れぬといふ狀態まで差し迫つて來たのだ。勿論、吾れには無敵の海陸防衛陣があり、吾人はこれに充分の信賴を置くものでは有るが、只それだけで國民が手を空しふして、萬一時期を失するやうな事があつてはならぬのは言ふ迄もない。都市といはず、農村といはず、國を擧げて民防空のあらゆる手段方法が講ぜられねばならぬのは勿論である。

一般に、空爆に對する文化資財についての考慮は、存外閑却せられて居るのではないかと思ふ。筆者が寡聞で、從來耳にするところが尠ないのかも知れぬが、とりたてて斯うといふ程の施設の、現に行はれて居るといふ實例に、頗る乏しい感がある。果して之れが事實であつたとすると、こは容易ならぬことで、吾人は今日直ちに、之れに對する適當な安全策を急ぐ要がある。一日遲れたら、最早や取返しのつかぬやうな事が勃發するかも知れぬのである。

長れ多い話だが、吾が帝室御保存の分や、各帝室博物館、大學等に所藏の分については、或る程度の安全性が認められると言つて宜いかも知れぬ。併し、之れとても、絶體的のものでないのは勿論だ。建築施設の古いところでは、案外簡略に不完全な土藏位に仕舞れて、一向平氣な向が多いのじやないかと想像する。帝室や大學關係以外の所では、公共團體や古社寺に多いと思ふが、之れ等に對しては、何等特別の注意が拂はれて居らぬといふのが實際では有るまいか。空爆の重點が、主として國防や軍事施設にあるは言ふまでもないが、それ計りに限るとは誰れも保證し得ない所であつて、對手が對手だけに、何時何處に、何を仕出來かすやら分らぬのである。

民間の富豪級の所藏品については、事變前から既に相當の考慮を拂はれてゐるものもある。でも其の目的とするところは主として防火で、今日のやうな事情にならうとは誰れしも思ひつかなかつたところであるから、防空上の安全保存策としては多くの缺陷のあるは勿論だ。又、その實例としても、ほんの一二に止つて、多數は依然として不完備の下に放置されて居ると言つて宜い。民心攪亂の意味に於て、住宅地區が目標となり得るのは誰れにも考へられることで、既に歐洲ではその實例が幾度か繰返へされて居るのである。

人間の疎散と共に、文化資財の疎散といふやう

な事も一應は考へられる。筆者の知人で多數書畫や骨董品の所藏者は、支那事變の當初にあつて、既にこの疎散策を講じたのが珍らしくない。比較的安全なりと思はれる市美術館に保管を依託するとか、或は地方の知合や緣親に依頼する類だ。海を越えて淡路の知人のもとへ移したとか、丹波や大和の山奥へ、知己を求めて保存を依頼した等の話を多數耳にしたのである。

何れにしても、一ケ所に多數纏めて置くよりも、之れを出來るだけ分散して置くのは、それだけ危險率が少なくなるのは明らかだ。悪いことでは無い。でも、富豪の所藏する書畫や骨董品の類は、文化資財といへば言へるやうなものの、筆者の見地からすれば、實は奈何でも宜いものが多數にあると考へる。吾人が爰に文化財として、極力受難を避く可き對策樹立の要を感ずるものは、もつと國家的に重要なもので、生命に代へても、保存の責務が吾人の頭上にあるものだ。お家の一大事として猛火中に飛び込み、傳來の寶物の無事をはかつた等の美談が昔にもある。兎に角、文化財保存の緊急性について、一般がもつと認識を深くすることを主張する。

家系の保存

吾が國では、昔から何よりも家系といふやうなことが大切に考へられて來た。『家柄』といふ言葉も、連綿と家系が續いてゐるといふ意味で、少々の資産があつても、家系のはつきりせぬ家は餘り尊敬せられぬ風習であつた。

この家系を尊重することは、自然とその家の祖先を大に考へる事となり、その祖先を神として祭る習慣が早くから發達してゐたのである。一身よりも一家の利害を重んじ、立身出世といふことも、個人としての成功といふよりは、寧ろその家名を昂揚し、祖先の名をはづかしめぬといふ所に終極は歸するのが常だ。萬葉集にある有名な、彼の大伴家持が其一族を訓戒した長歌の如き、一にも二にも祖先の名を辱かしめぬといふ所に重點が置かれて居るなど、その最好例だ。

古い土地程家系の正しい家が多く、新らたに開けたところは寄合世帶が多い結果、さうした家が至つて尠ない。これがその村や町の色々の風習にまで影響して、その土地の氣分に多大の相違が見られる。家の造り方を見ても、この事はすぐ心付く點である。古い土地には、何とも知れぬ落着きがあるが、新開地にはそれがない。一つの都會にしても、その中心となつて居る古い所と、場末の新らたに發展した所とでは、やはり同樣の相違が認められる。

住宅を建てるに當つても、家系を重んじた昔の人の考へと、今の人の考へとでは、可なりの開きが感じられる。明治維新はあらゆる歐米の文物を移入して、吾が國力の發展に偉大の効驗をしたのは事實であるが、同時に思想的に個人主義や資本主義、營利主義をももたらして、吾が傳來の美風良俗を毒した點も亦大きい。祖先を尊崇し、家系を重んじ、何よりも『家名』を大切にした考へ方に大きな龜裂を生ぜしめた。昔の人は、住居を建てるについても、一身一家の現狀の利便をのみ計るといふのでなく、是れを永久に子孫に傳へるものとして、さて奈何考へる可きかに重點を置いたのである。從つて、專ら個人主義思想に培はれた今の人の考へ方とは、大きな相違を生ずる結果となるのは當然だ。遠い祖先の過古を思ふものは、未來の遙かな子孫にも同じ樣な考へが及ぶ可きである。

大阪は土地柄として、家系の正しく古い家が相當にある。昨今は餘り、左樣した方面に一般の注意が向けられて居らぬやうではあるが、委しく調べたら、存外古い家系の人が多いのじやないかと思ふ。筆者の知人に西村太郎助といふのがあるが、この家の祖先が架けた橋が、たしか阿波座か立賣堀にある『太郎助橋』として今も現存して居るさうだ。かうした個人の特志によつて架けられ、その名殘が橋の名に殘つて居る例は他にも多いが、其の特志家の子孫が、先祖と同じ土地に、今尙ほ嚴然と存して居るなどは誠に珍重すべきで、日本でなくては見られぬ例じやないかと思ふ。

家系を大切に考へ、その保存に專念する吾が家族主義的思想こそは、吾が良俗美風の最なるものと言つてよい。萬邦に比類のない吾が國體の擁護も、尊皇心も、愛國心もみなそこから出發する。不幸にして明治以來一時、外來思想に侵かされて多少の緩みはあつたにしても、そんなことで容易

に消え去るやうな根の弱いものではない。支那事變に續いて大東亞戰の勃發以來、今や再び國民一般に再認識の機會が與へられ、家系保存の考へ方もめきめきと成長發育して居る事實を、あらゆる物の上に見られるのは何よりだ。偶々類して等しからざる底の非國民型がないではないが、それ等にしても何時までもその儘で居られる筈はない。やがては自覺の時があると信ずる。只筆者の特にうれへる點は、さうした非國民型の人間が、返つて有識者と言はれる側の人に多い事實だ。この點は分けても注目を怠らぬ要ありと信ずる。

家は間引かる

防空問題の急迫と共に、都市家屋の疎開と都市人口の疎散が盛んに言はれて居る。この事は決して今更ら事新らしく述べ立てる迄もなく、いやしくも事が都市防空に關する限り、殊に吾が國大小都市の如く可燃性の家屋で固められたやうな所では、誰れしも第一着に思ひ付くことで有る筈だ。それがやつと此の頃取り上げられて、當局の口からも呼號せられるに至つては、いささか5日の菊、10日のあやめの感なきにしも非ずだが、今時そんな屁理屈を並べて居る場合でないのは筆者もよく承知して居る。今からでも遲くはない。即刻に着々と實現の手段を講ず可きだ。

たしか紀元二千六百年の記念事業としての大阪市の案に、市内に5千乃至1萬坪の空地を、80ケ所乃至100ケ所位設けるといふのが有つた樣に記憶する。それは結構な話で、必らず實現するものと考へ、1日1日待つて居たのであるが、何ういふ事情があつたのか沙汰止みとなつたと見へ、今日迄何等さうしたものも出來ずにすんで了つた。若し左樣いふ計畫が實現して居やうものなら、現在吾が大阪市の防空施設上、何れだけ役立つたか分らぬものがある。返へす返へす實現の運びに至らなかつたのは殘念だ。

當局の意向として新聞に傳へられてゐるものによると、都市人口の疎散についても、それが爲めに、一家の生活の分離を來たすやうな結果となるのを避けたいとの事であつた。之れは至極御尤な意見で、筆者も滿腹の讃意を表する次第であり、それには務めて產業施設の分散を思ひ切つて斷行し、工場と一所に、人間をも分散せしむるといふのが上乘であるのは言ふ迄もない。

この事は單なる意見といふだけでなしに、事變以來徐々に實行せられつつ來たことで、意外な場所に、思ひもかけぬ新工場が出來て居たりするのは、吾人の度々出あふ事實だ。東京都や大阪市の人口は且つて表號せられて居たものより、今日では數十萬人減少されて居ると言ふ人もあるが、その數の如何は兎に角、既往に於ける工場の分散方針によつて、大なり小なり都市人間の數が減つたといふのは事實であらう。併し、それだけで滿足するには餘りに事態が迫り過ぎて居る。家屋の疎開にしても、人口の疎散にしても、今日ではもつと積極的な法策が望ましいのである。生活の分離は決して好ましい事ではないが、それも時と場合による事で、止を得ぬ事態もある筈だ。何れにせよ一日の瀆安も許されぬといふのが今の實情である。

今日の戰爭は、何よりも多く敵國の人命を失はせる事だ。第一戰線にある將士は勿論のことではあるが、後方銃後に在つて、比較的生命だけは安全なりと目されて居る向をも、どしどし攻擊して、國內人心の攪亂を計ることに何よりも戰爭目的が置かれて居る。昔の平面戰では、此の事が實現せられなかつたのであるが、今日の立體戰となると、それが容易に實現せられるのであるからたまらぬ。今では人命の危險といふ事に對し、前線も銃後もないと言はれるが、全くその通りだ。

英國や獨逸に於ける防空にみても、最近は1人でも多くの市民を傷けまいとする、市民の避難施設に重きが置かれてゐる。資材の不足などは問題とされて居らぬらしい。何はさて置いても、完全な耐彈防毒の設備のある一般避難室の建造が主とされ、又、それが着々實行されてゐるのだ。前線にある將卒が如何に勇戰奮闘されたとしても、知らぬ間に銃後でどしどし人種が間引かれ、戰爭に對する恐怖心が瀰漫するやうでは、結果敗北に歸するは火を見るよりも明らかで、敵國のねらひが、之れに集中されてゐるのを明白に看取すべきである。

— 40頁に續く —



或る建築家の日記

青山正義

×月×日

昨夜歸還作家の手記を讀む。

彼等の多くは、苛烈な現實の前で「始めて日本人であることの眞實さを知つた」と云ふ。

私は作家と云ふものゝ誠實さを認める。然しさう言ひ切るだけに問題はより深く殘されてゐるであらう。彼等がこの間まで、御題目の樣にとなへてゐた「人間」は何處に消失したのであらうか。そして彼等のふりまいたヒユマニテーの過信を訂正する事は、やはり彼等の義務であらう。

知性が人間を支配するなどと云ふ物語は人類の我身知らずの思ひ上りだ。

科學は眞理でなく創造である。尠くとも人間にとつて創造でなくてはならぬ。でなかつたなら、科學の價値は自然の風景と大した變りはないであらう。

知識の說明は人間にいろいろの事を敎へた。だが最後の瞬間に於て逆襲した。

我々建築家も、もうそろそろ仇討に出かけねばならない頃だ。

×月×日

今日は上天氣だ。

午後から現場へ出る。大部完成も近くなつた。

『ずらりと並ぶと馬小屋の樣だね。』

『冗談じやない。馬小屋はもつと上等だよ。』

そんな事はどうでも宜いのだ。要は精神だよ。おゝ精神ヽ、萬能なる精神、ビタミンもカロリーも充分だ。我々は精神を喰ひながら、瘠細つてゆく。我々はつひに細々と叫ぶだろう。俺は一生懸命なんだ、と。そして神の不公平を詛ふだろう。

だが人生のポスターには次の如く書れてゐる。

『行動とは意識した目的への運動である。人間を幸福に導く行動は人生の責任感に裏付けられた精神に依るものであらう。』と。

兵隊は草のしとねに寢、草の根を喰つて立派に人間として歷史を造りつつある。精神まで喰つて營養不良になつては國家に申しわけがあるまい。

私も馬小屋が立派な人間の——歷史の住家となる樣に努力したいものだと思ふ。

×月×日

私は死んだKなどにはよく「君は型而上浮的で、觀念的で、心理至上主義的だ」と云はれたものである。

併し私は不幸にして何々主義と云はれる程、純一に主義に徹する事が出來なかつた。私が現實の內から一步も踏み出そうとしない用心深さが、一つのことに徹する志向を拒否してゐる爲でもあらう。

私が時々建築家であらうと考へる時は、大體樂天的な時限である。

建築が自分にとつてそんな關係にある事は、私にとつても、建築にとつても決して結構な在り方

ではない。恐らく自分の方に罪があるのであらうが、不明瞭な建築と云ふ技術——藝術が持つ陷穽は案外こんなものかも知れない。

×月×日

先日久しぶりで銀行屋の従弟が遊びに來た。

「君達技術屋は氣樂なものだ」と言ふ。「現在自分は日本の統制經濟の必然性を確信する。がそれに到達する迄、自分としては非常に努力した。その點君達は高處の見物で我々の膳立の前から出發すればよいのだからね」

然し本當に技術屋はそんなに氣樂であらうか。

人間の世界が過去の上に基ずかれた發展以外に飛躍の過程がないと云ふ歷史的事實を否定出來ない限り「統制經濟は自由經濟が利潤究求の爲の犧牲として發生せしめた社會惡を、國家の生產擴充へ必然として精算してゆくであらう」と云ふ樂觀說は氣早に鵜呑に出來そうにない。

成程技術は利潤の强制から開放せられた。然し一方技術は絕對絕命の境地に於ける重任を負されたのである。今日の技術家の課題は利潤の都合によつて採用される技術の研究でなく、生產そのものゝ技術的解決を、その位置に於て强要されてゐると云ふ事も出來よう。だから技術屋がぼんやりしてゐても國家的意義があると云ふ事は少々虫の良すぎる考へだ。

「生產擴充が必然的に精算してゆく」と云ふ事實も、もともと人間を基礎としての話しであらうから。

×月×日

築田建造氏へ

私は9月號本欄の築田建造氏の「住宅建築家の『しごと』は無くなるかなくならないか」の私の雜文に對する一文を讀みながら、ふとその論調より、先日徵用者として重要任務のために出發した友人Kに遠ひないと氣付いた。そして今更君に多くを言ふ必要もないであらう。不幸にして私の論理的換作の不充分な一雜文が君の希望する「大論證」でなかつたことは、返へすがへすも殘念である。君の例の强引な概念規格癖によつて、前後の手足はたち切られ、罪狀つまびらかならざるに、すでに斷罪に處せられてゐる片々たる言葉に就いて、改めてその原語の意味を形式的武裝によつて、說明することも我々の間ではすでに興味ないことであらう。たゞ君は「深遠なる誤謬に滿ちた」私の主張に對し、なぜ不明確な贊意を表し、その上今後に續くべき一つの（唯一のではない）提案さへ敢へてしたのであらうか。私は「住宅建築家の『しごと』が無くなる」と云ふこと自身の根本的思念に對する痛烈な批判と誠實な叱咤をさへ希求したのであるが。

たゞ一つ私は次の君の言葉は聽流すことは出來なかつた。「人は歷史の實在を肯定しながら、而かも現在の問題に觸れないことも出來るし、また歷史の現在を肯定せずして現在に觸れることも在り得るのである」

例へ君がことも出來ると可能の局限性を付與することに依て、その思推を論理的に肯定しようとしても、歷史の實在が「在るものであると同時的に、在らねばならぬものである」と云ふ歷史の根元に突當つた瞬間「現在の問題に觸れることなく」と云ふ現在（今日に於ける）の概念規程の據りどころを何處に置こうとするのであらうか。現在の問題が生命的な意味で執りあげられなければならない限り、歷史の實在は、又現在の問題であらう。

勿論君にこの解答を迫ることは、卑怯な質問であつて、或は時代の努力と云ふものゝ解決點はこゝに在るとさへ言ひ得るかも知れない。

併し、我々は一應互に異なる支持に依つて現在を確信する。それ以外に發展の方法は無いであらうから。而も現在が何んであるかと云ふことは、新しい秩序の中に、自己の確信を本當の意味で更踐的に打ち立て得た人々こそ始めて、眞の發言者となり得ることであらう。

君が斷片的にとりあげた「人間論と國民論と建築家論の並立觀」「家族主義と個人主義」「社會全體主義的建築觀」等々——君はまさか私に既成概念百貨辭書を引き出せと言ふのではあるまい——はその確立の努力なくして、低次の單位に於て、早急に解決すべき問題ではないであらう。

そしてそれ等は、むしろ若い我々にとつて純正な導標ですらある。我々は時代を通して、その一

つ一つに前進して行きたい。或る場合は單なる揚言に終るかも知れない。又時には間違をおかすこともあらう。然しその事によつて、我々は始めて次の時代の確立を祈念する事が出來るのである。

私は今君の新しい出發を心から羨しいと思ふ。そして再び逢ふ日に君のたくましい發展と抱負を期待する。元氣で御奮闘あらんことを。

（尙、萬一築田建造氏が私の豫想の人物でなかつたなら本名に於て名のられんことを。）

（筆者は　住宅營團大阪支所建設部勤務）

中支に於ける建設

富田　清

三年有餘に渉る中支生活より別れを告げて久し振りで祖國の土を踏み、新聞で讀み又聞いてゐた以上に國民各層に緊張があり、餘裕有りげにこの大戰爭を遂行してゐるを見、心から力強く感じました。この狀況を第一線を守備してゐる戰友達に聞かせたらどんなに喜こび意氣百倍する事かと思ひました。

中支に於ける建設、目下決戰の年々を迎へ益々拍車が加へられ、增産への建設が行なはれ、あらゆる方面に多忙を極めてゐます。先づ建築方面、過三年の戰禍に依つて、破壞又は中絕中止されてゐた建物は着々と工事を開始してゐます。專ら建築材料は追送を一切受けず、現地の建築は現地材を以て爲すと云ふ建前に則とり、着々と使用建設の運びを取つてゐます。大きな仕事はほとんど軍の仕事で一定の期限を定められて行なはれてゐます。樣式は全部木骨煉瓦造りでやられてゐます。仕事は軍の手で設計されて、これが現地の請負人に請負され、又信用の有る中國人に請負されてゐます。目下の處南京建設現狀は飽和狀態であるが上海、漢口邊り活況を呈してゐます。特に漢口では大きな仕事が次々に行なはれてゐます。小生は專ら前線方面の建設計畫を擔當いたしてゐましたので後方の細かい點は知らないが、材料受領其の他の用件で出張いたして來ます際軍司令部の建築課々長と話す際、次は何處にだと申してゐます。最早や戰ひの爲めの建築は一段落を告げ、文化建設の爲めの建築に變つて行つてゐます。小生の設計したものに國際倶樂部、中國の國劇をやる劇場いずれも十萬圓の豫算を以てやりました。其の他敎育の復興につれて小學校建設が興り、これは漢口より三十里程離れた地に建てましたが延坪 540 坪のものを省政府と當地警備隊と連絡の上直營工事をいたしました。三階建木骨煉瓦構造の敎室を備へたもので、天井はテツクス張りで外裝は淡緣色のペンキ塗仕上とし防空に對して、各階共避難所を設けてあります。日本の縣に相當する縣が省政府下に有り、その縣政府の所在地では目下大小それぞれに建設事業が行なはれてゐます。が小生の擔當は專ら施工方面でありました爲め一つに見學の期を得ませんでしたが、竣工報告を見ますとそれぞれ立派なガツチリした建物です。

都市計畫と道路の整備が盛んに行なはれてゐます。都市計畫は專ら支那舊市街が人家が稠密いたしてゐます上に、最近は空襲の度が增加いたして來ました爲に家屋竝に工場の分散疎開の叫ばれ、これが爲めに、縣當局と省政府當局と現地部隊の警備に關與し、將來の發展を期する上に於て都市計畫が行なはれてゐます。大體の處目下人口5萬以上を有する街都市には、都市制を設けしくことになり、これが規則の制定を見てゐます。がこうした事に對して、うとい支那の人達に一朝一夕に浸潤させる事は困難ですが、縣當局普及に努力いたしてゐました。都市計畫は縣政府土木服に都市計畫部を設け、都市計畫地方委員が一名省政府建設廳より派遣されてこれが部隊より派遣された指導員と連絡してやつてゐます。都市計畫の計畫は專ら委員と現地部隊より出てゐる指導員（建築又は土木の專門學を攻めた兵又は下士官）とで立案計畫され、これを省政府と軍司令部、現地部隊に提出して許可が來れば工事をいたすことになつてゐますが、常に防空と云ふ事を第一に眼目に置いて計畫し施工しなければなりません。吾々が行ひました

都市計畫經驗は誠に未熟ですが大きなものを二個所行ひました。一個所は約30萬坪位の處を都市計畫いたし、他の一個所は50萬坪位のもので、どれも衞生都市に依る武裝都市に計畫いたしました。道路の改修など大々的に行なはれてゐます。支那の道路は御存知の如く、一度雨が降るとぬかる事田圃の如しです。これが改修と補修工事は非常ならぬ困難がともなつてゐます。道路と平行して橋梁の架設と擴張改修と誠に目まぐるしい建設を行つてゐます。建築資材は惠まれて材料は豊富で、煉瓦、瓦など事かきません。石灰など落質なものが製造され、セメントは專ら上海、又は南京製に依つてゐますが如何に大工事をなさうとも不自由はいたしません。釘、補强金物、鐵筋等、戰前のものが現在まで持ち越されて、まだまだ前途程遠しです。

繰返へされる空襲に防空と云ふ事、防空壕の設置、避難所、實によく設けられ、立派なものが設けられガンとしてゐます。いづれ又防空の事に關しては書かせて頂きますが、吾等として學ぶべき事が有ります。又數度受けた實際の空襲とその樣に、攻撃等に關しては他日にいたします。

支那の建築技術者は目下非常に不足いたしてゐます。これは教育機關の不備にもよるが、今後の建設を爲すに當り必要の事と思ひます。大工、左官の技倆は今後大いに日本技術者に依り指導しなければならないと思ひます。誠に拙文ですが目下の中支の建設狀況をお知らせいたし、三年有餘の間協會より度々慰問の品々を頂きした事を厚く紙上より御禮申します。

（筆者は歸還勇士、元日大工學部教室研究室）

— 36頁より續く —

吾が都市の現狀からみると、避難室の現地建設も然ることながら、それは明日の間に合はぬとして、差當り都市家屋の疎開と、之れによる人口の疎散を急速斷行の他に途なしといふ可きだ。吾人は決して敵の空爆を徒らに恐るるものではない。併し、眞に恐る可きを恐れずして、何等是れに對する適切な對策をも行ひ得ぬといふに至つては沙汰の限りで、危險此の上なしだ。軍といはず、官といはず、民と言はず、一致協力の實を盡くして、都市人口の疎散を計り今日の國難を最少限度に除却することに努め度い。（了）

美素

古い住宅も新築同樣となる
新築住宅にお手入のいらぬ

☆新築家屋美素加工
新築落成と同時に本所獨特のビソ液にて洗淨し木材變色の原因となる樹液を取り、其の上をビソにて仕上の加工をすると完全なる變色防止加工となり、優美な艶を有しフキコミの勞を省き頗る經濟的です。

☆古家屋新裝美素加工
古家もビソ液で洗淨すると新築同樣となり、其の上を新築美素加工と同樣の加工をすると前者同樣の結果となる。

（特種技術を要しますから弊所の請負加工と致して居ります）

大阪市天王寺區東平野町四丁目二一
美素工業所
電話天王寺(77)四〇〇三番

會報



名譽の戰死者

會員

陸軍上等兵　藤本阡夫君

1. 君は大正7年4月1日德島縣麻植郡川島町に生る。
1. 昭和10年3月德島縣立工業學校建築科卒業後後川工務店を經て大阪市建築課に勤務。
1. 同15年9月16日本會に入會。
1. 大東亞戰勃發後前線に出動勇戰中昭和17年12月8日南方に於て名譽の戰死を遂げらる。
1. 本會は留守宅を訪ねて忠靈に香花を供へ感謝の念を捧ぐ。

茲に近影を掲げて冥福を祈り厚く敬弔の意を表す。

常務會（第19回）

時　10月4日午後5時35分—6時

所　本會別室

出席者　理事　松本副會長

常務　中西主記、藪中主記、小林主計、西澤主計、松久保主計、大下編輯、小林編輯

議事

1. 事務員解傭並に採用の件
2. 會員詮衡

報告

1. 出征、除隊報告

常務會（第20回）

時　10月18日午後5時40分—6時30分

所　本會陳列場

出席者　理事　竹腰副會長、松本副會長

監事　池田監事

常務　佐藤主記、中西主記、藪中主記、松久保主計、伊藤編輯、大下編輯、小林編輯

議事

1. 11月例會に關する件
2. 構造防災委員會より委員委囑方要求の件
3. 昭和19年度豫算編成に關する件
4. 評議員會並に通常總會開催に關する件
5. 會員詮衡

報告

1. 9月分會計報告
2. 大林社長逝去に關し禮狀の件
3. 出征、入營、除隊報告

大阪會勢幹事會（第6回）

時　10月15日午後5時30分—6時30分

所　本會別室

出席者　常任幹事　中野、三浦

幹事　河津、小西、星、安田

協議事項

1. 11月行事に關する件

京都見學會

時　10月22日午後1時30分—7時

所　稻荷神社、陶磁器試驗所、泰山製陶所

出席者　荒木久義氏外27名

1. 秋晴れの午後1時30分—同官幣大社稻荷神社々頭に集合社前に於て皇軍將士の武運長久を祈願の上徒歩にて正覺町の商工省陶磁器試驗所に至り階上參考陳列品を觀賞後集會室に休憩
1. 午後2時30分山本京都幹事の紹介により秋月同試驗所長より陶磁器並に同所組織、現況の大要等につき講演あり次で保野技師より一般作業の行程に關し懇切なる說明を聽取次で松井京都幹事より一同を代表して謝辭を述ぶ夫れより保野技師の案內により第1部より第4部迄所內隈なく見學各部主任技師よりも詳細なる說明及質疑に對し應答あり一同陶器に關する智識を新にし且つ同所の研究が時局向に日夜邁進されつゝあることに感激しつつ4時20分同所の見學を終り辭去す

1. 折柄の時雨は晴れたるも京の街はさすがに稍冷氣を覺へ且つ秋天の日足の早きに一同次の見學に思はず歩みも活潑となり午後4時35分大石橋泰山製陶所に入り二階應接室に於て小憩後隣室設けの席に一同のために特別準備されたる素燒湯呑の樂燒に各自特意の腕を揮ひ暫し無我の境に入り思はず自作に微苦笑をなしつつ工場内見學を了し午後5時40分同所を辭し一路京都驛都ホテル出張所食堂に到着

1. 午後6時一同夕食に空腹を充たし本日の見學に滿足の裡に藪中幹事長より京都幹事各位並に參加會員に謝辭を述べ且つ今後の協力を切望して午後7時無事終了一同解散す

文樂座見學會

時　10月23日午後3時30分—9時
所　四ツ橋文樂座
出席者　井上一雄氏外29名

1. 午後3時30分頃より文樂座に集合一同二階廣間に於て休憩
1. 午後4時三浦常任幹事より桐竹紋十郎氏を一同に紹介、同氏は人形を應用して文樂座起原、人形使の變遷、動行、人形の使方其他に關し數十年に亘る經驗を基礎に約一時間懇切なる說明あり一同人形に關する認識を新にす
1. 午後5時より一階指定席に於て同座夜の部を觀劇、一幕終了後食堂別席にて夕食を喫し引續き終幕まで觀劇午後9時終演と同時に一同隨意解散す

編輯幹事會（第11回）

時　10月25日午後6時—7時半
所　集會室
出席者　幹事長　小林
常務　伊藤、大下
幹事　中野、增井、山口、星

議事

1. 12月號原稿依賴先督促狀發送の件
1. 凸版廢止の對策に就て
1. 新年號原稿依賴先及裝幀考案に就て
1. 雜誌の組方に就て

會員動靜

入會

會員

大島義雄君　神戸市林田區駒榮町1の5の1（自營）
木下佐一君　西宮市中須佐町58（阪神急行電鐵株式會社土木部建築課）

地方會員

片山　茂君　洲本市山下町甲841（洲本市役所建築課）

特別賛助員

川上來三君　芦屋市打出下川原15（松尾橋梁株式會社）
降旗太郎君　高崎市新田町59（建築材料販賣業）
宮本德一君　住吉區紫谷町35の1（大倉土木株式會社作業所）
八尾正次君　住吉區粉濱東之町4の13
小泉嘉四郎君　大分縣今津留吳濱軍施設部大分工事々務所
工藤　潔君　靜岡縣椿原郡勝間田村大澤原（横須賀海軍施設部大井工事々務所）
富吉良之君　埼玉縣入間郡豊岡町（陸軍航空士官學校内松村組豊岡出張所）
伊勢村四郎君　兵庫縣揖保郡網干町字濱田626
清原道義君　朝鮮平安南道佑川郡朝陽面（朝陽鑛業株式會社内）
佐藤靜也君　府下北河内郡寢屋川町字郡1618
佐々木幸太郎君　中津市字永添大林組中津出張所

普通賛助員

木原幹三君　東京都四谷區三榮町26の3

退會

會員

加藤勝彥君　福田享吉君

地方會員

池永恒男君　石田　收君
岡田　撲君　小針三郎君
杉本義夫君　星川庄八君

特別賛助員

高見正彥君

普通賛助員

諸木信太郎君

轉居・轉勤

會員

古川　晃君　廣島縣賀茂郡乃美尾村吳海軍施設部工事事務所
渡邊義雄君　滿洲國奉天市大和區彌生町43（鴻池組奉天支店内）
米田貞一君　東住吉區北田邊町727
柏本正博君　和歌山縣海草郡西脇野村字磯脇
小林清造君　和歌山市布經町2の2
今西茂雄君　阿倍野區西田邊町50
谷口治郎君　吹田市北泉町3229の3
海野浩太郎君　下谷區上野櫻木町36（勤務先）東京都京橋區寶町2の1の1清水組本店内

地方會員

黑田知好君　朝鮮慶尙南道鎭海海軍施設部第5宿舍
山口誠志君　愛媛縣溫泉郡生石村淺野武夫殿方
渡邊利雄君　福岡市天神町九州配電工務部建築課
飯田豊松君　吳市本通6松村組吳出張所
四日健夫君　東京都立川市富士見町1の2138
勝浦武治君　德島市中島田町2の56
水谷英男君　通化市龍泉區興隆街2の9の3（勤務先）通化省公署實業廳建設課
帆玉隆司君　咸北淸津府東松鄕町38
石塚保君　西淀川區中島町453
廣畑重太郎君　港區市岡濱通5の14
中村武雄君　橫濱市戶塚區原宿町橫須賀海軍施設部戶塚工事詰所內
山田誠君　舞鶴市三條濱水交社宅10號
古都猛雄君　福井縣南條郡武生町浪花の5
菅田登美雄君　滿洲國奉天市大和區加茂町16滿洲大林組本店
竹中稔雄君　大正區三軒家西2の6
德田嘉作君　熊本縣荒尾市萬田1602
宮脇正夫君　朝鮮釜山府草梁町釜山建築區
笠野藤吉君　京都府與謝郡栗田村舞鶴海軍施設部出張所
立木十十六君　德島市紺屋町立木貞一殿方

特別贊助員

奥津又一郎君　堺市北半町西1丁堺特殊塗料工業所
名取喜久君　東住吉區駒川町8の21

普通贊助員

近藤保君　京都市下京區新町通松原南
加味半治君　西區立賣堀南通4の18前田工務店內
大松正之君　廣島市鐵砲町74
橫山一夫君　北京市2區司法部街小四井眼井甲40華北電業公安寮內
遠矢博久君　豊中市上野區1398
浦野紋次郎君　朝鮮咸鏡北道會寧郡大日本紡績弓心炭鑛
植松亮君　愛知縣碧海郡明治村東端海軍施設協力會明治隊小林班

死亡

會員

下畑春太郎君　昭和18年9月19日逝去

地方會員

橋高壽君　昭和18年7月26日逝去

普通贊助員

西野春夫君　昭和18年9月29日逝去

（謹んで哀悼の意を表す）

建築と社會
第26輯　第11號

毎月1回1日發行　賣價㊎ 1冊稅込55錢（郵稅2錢）
12冊6圓60錢（〃 24錢）
昭和18年10月25日印刷　昭和18年11月1日發行

發行・編輯　戶川弘
印刷人　大阪市北區朝日ビル日本建築協會內
印刷所　新日本印刷有限會社　大阪市北區南錦町46番地
發行所　社團法人　日本建築協會　大阪市北區中之島3ノ3朝日ビル　電話長北濱(23)4501番(9)　振替口座大阪39975番　日本出版文化協會會員番號222043
配給元　日本出版配給株式會社　東京市神田區淡路町二丁目九番地

禁轉載
本號に揭載せるものは一切これを無斷にて轉載し又は單行本に上梓その他の複製行爲をなすことを禁ず。

●第二六集 第一一号 掲載広告一覧（掲載順）

日本陶織
日本竹筋工業所
米本栄商店
ライトラバー商会
日光建材社
織本建築設計計算事務所
矢橋大理石商店
南満建材工業所
鈴木機械工業
平松釣戸車製造所
協和製作所
大阪窯業セメント
萩工業
大西商店
大阪伊丹産業
光握制正社
関城化学工業
東亜化工
東洋リノリューム